# 潜在能力は有効に使いましょう（コメディ系）

達ノ音吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
潜在能力は有効に使いましょう（コメディ系）

【Ｎコード】
Ｎ７９４４Ｚ

【作者名】
達ノ音吉

【あらすじ】
笹木涼（主人公）は平穏な日常に過ごしていた。　幼馴染のエル（巨乳）や悪友の燐（負け犬）とともに、平凡なりとも面白おかしく日常を楽しんでいた。　ある時、涼たちのクラスに転校生がやってくる。銀髪の少女――リア（貧乳）と名乗った彼女に対してクラスメイトたちの反応は……土下座だった。　神、魔王、死神、ドラゴン！！　なんでもありの潜在能力を持つ少年が織りなす――学園ファンタジックコメディです。
１１０００ＰＶ超えました！

着々と「潜有ファン」が増えてきて、音吉は幸せです！
※旧作「潜在能力は有効に使いましょう」の改稿版です。しばらくしたら、こちらに全部移すつもりなのでその旨よろしくお願いします。

# 1　おっぱい談笑

「もうっ、いい加減にしてください！」
「……黙るのは、あなた」
源荘七号室（みなもとそう）。
今にも抜けそうな床と、所々かびた畳。
老朽化した六畳一間の造りが何とも言えない侘しさを醸し出している。見た感じを一言で言うならば、「廃れている」が妥当じゃないだろうか。
そんなこの部屋に響き渡る乙女たちの怒声――
「あなたが何を言おうと、涼くんは渡しません！」
金色に輝く髪をした少女――エルは大きく盛り上がる二つの隆起の前で、手をぐっと握り締めた。まっすぐに据えられた瞳は、「絶対不譲渡」の意志を秘めている。
ちなみに「隆起」とは――おっぱいのことだ。
彼女の豊満なそれは、見る者を魅了し、虜にする。
「涼は私のもの。これは決定事項」
小さな声で呟くのは、幻想的なまでの銀の髪を持つ少女――リア。
彼女は一寸たりとも表情を変えることなく、淡々と答えた。
おっぱいは、小さい。
エルと違って身体の起伏が乏しく、非常に小さい。
大事なことなので二回言いました。
「なっ、そ、そんなのずるいですっ、断固抗議します！」

「ずるくない……かしこいだけ」
「い、一緒じゃないですかっ！」

納得がいかないと、頬を膨らませ不満そうに言うエルと、気にするそぶりもなく、難なくとあしらうリア。
交錯する視線と視線のぶつかり合い。間に火花が散っているかのように両者は互いににらみ合い、一歩も引かない意志を見せ合っていた。
――そんな様子を遠目で眺める一人の少年。
何を隠そう……いや、何も隠してないけど、僕こと、笹木涼（ささきりょう）のことだ。僕はもうかれこれ一時間以上もこの光景を目の当たりにしている。
正直、暇だ。暇すぎて、ひつまぶしが食べたいくらいに。

「だ、だいたいどうして魔王側が涼くんを狙うんです？　涼くんは神の力を持つ者――手を出す理由なんてどこにもないじゃないですか！」
「違う……涼は魔王の力を持っている。それは実証済み」

そう言うと、リアは艶めかしく唇をなでる。

「う、嘘です！　涼くんが魔王だなんて。そ、それに今も神の力を感じますし！！」
「私だって魔王の力、感じる。だから涼は私のもの」

うーむ、何やら僕の話をしているようだが、何を言ってるのかさっぱりわからない。
神？　魔王？
ファンタジーな妄想は中二で卒業し――はっ！？

「ま、まさか！　僕は3ちゃんねるの神――」
「じ、じゃあ、涼くんは相反する二つの最高位の力――神と魔王の力の両方を持っているということですか……？」
「そういうことになる」
「……」

僕に一瞥の反応すら見せず、二人はおのおのに驚愕を露わにしていた。
べ、べつにかまってくれなくて悔しいなんて思ってないんだからねっ！
……話の内容から察するに、僕には神とか魔王とか、何かしらの力があるらしい。しかも、それはすごいことのようだ。それは二人の驚きようを見れば一目瞭然だった。

「――あっ」

脳裏をよぎったことに、僕は思わず声を上げてしまった。

「どうしたんですか？」「……何？」

先ほどまで言い争っていた二人は、揃って僕のほうを訝しげに見てくる。
フッ、それも些細な事さ。
僕は気づいてしまったんだから――そう、とても重要なことに。
それはこれからの将来を左右するかというほどのことだ。

「――ひとつ、聞いてもいいかな？」

仰々しく人差し指を立て、僕は真剣に言った。

「それは就職で有利に――」
「なりません」「ならない」

即答だった。
どうやら神や魔王は資格ではないらしい。
ふぅ……世知辛い世の中だよ。

○●○●○●○●○●○●○●○●○●

二日前のこと――
僕こと、笹木涼はいつもどおりに平凡な日常を過ごしていた。
いつもどおりに目覚め、いつもどおりに朝の支度をする。
それが僕の当たり前の日常であり、平凡だった。
朝のまどろみを春の暖かな陽気と、小鳥たちの囀りが盛り上げている。
もう、桜が満開になる季節。
春になると変なのが出てくると母さんから聞かされてきたけど、残念ながら今年はまだお目にかかってない。というか今まで一度も見たことがない。
まあ、それを言ってる母さんが一番変人なんだけどね。
僕が実家にいるときは「出たな、魔王！　その命、頂戴する！」
「ははは、神に使わされし勇者よ！　返り討ちにしてくれるわ！」と、父さんとイチャイチャしてるのを毎日見てたからね。真剣で切りかかったりとか、甲冑着てたりとかでかなりリアルだったけど。
まあ、傍から見てる僕に言わせれば、「いい歳して何してんの、この人たち？」って感じだよね。
つまり何が言いたいかというと、僕は変人がどれくらい変な人のことを指すのかがわからないということ。

幼いころから両親たちの変人ぶりを見ている僕はその手の感覚が麻痺しているらしい。
つい先日も悪友から「お前の幼馴染なんだよ！？　いろいろおかしいぞ！」と何やら批判されたところなのだ。

ピーン、ポーン……

慎ましいチャイムの音が響く。
おっ、噂をすれば何とやらで、
「涼くーん、学校行きますよー」
なじみのある透き通るような声。
玄関のほうから、悪友に言わせるところのいろいろおかしい幼馴染の声が聞こえてきた。
「あいあい、わかりましたよー」
曖昧な返事を返して、鞄をとり、朝食のパンをかじりながら玄関に向かう。
ドタバタと足音を立て、駆けていくと――そこには、金髪の美少女がいた。
眩しい金色の輝きが目に飛び込んでくる。流麗な長い髪と彼女の白無垢のような肌と相まってか、何度も見ている僕でさえ目を奪われてしまう。
見惚れていると「早くしないと遅刻しますよ！」と急かされ、ようやく我に返る。
「ふぁふぁっふぇふ」

わかってる、と言おうとしたが、パンを加えている状態なのでちゃんと言えていない。
気にせず、僕は腰を落として靴の紐を結び始めた。
「もうっ、本当にわかっているんですか！」
どうやら解読してくれたらしい。
さすが幼馴染、と思った。
僕がこっちに来ると言った時も、「わ、私も行きます！」と一緒に進学を決めたくらいだ。
今ではこの源荘の隣にあるデザイナーズマンションに居を構えて、毎朝僕を迎えにきてくれている。
本当に気のきく幼馴染だ。いっそのこと、お母さんって呼びたい。
「ごくん。出来た幼馴染を持って僕はしあわ――」
目の前の光景に息をのんだ。
パンを飲み込んで、靴ひもを結び終え顔を上げると――そこには二つの山があった。
おっぱいだ。
制服を征服せんがごとく、双乳が大きく自己主張している。
今、下から見ている僕からすれば、上が見えないほどの大きさだった。
僕は率直に――
「ごめん、エル。下乳で上が見えない」
「！？」
感想を言ってみた。
バッと後ろに飛び退くように僕から離れるエル。その顔は羞恥の

ためか、熟れたトマトのように真っ赤になっていた。
今さらだけど、彼女、エルトリーナ・ラファードは僕の幼馴染だ。
そう、僕らは小さいころからなんでも一緒だった。

「ははは、恥ずかしがることないよ。一緒にお風呂に入った仲じゃないか」
「っ！　い、今と昔じゃ全然違いますっ！！」
「うん。確かに大きくなったよね？」
「ど、どこ見て言ってるんですか！！」

どこって、そりゃ、ねぇ？
ひょうひょうとした僕の態度に、エルはすでに涙目だ。両手でその大きな胸を隠し、こちらをキッと睨みつけている。

「包み隠さず言うならば――おっぱいだよ？」
「ホントに堂々としてますっ。もうっ、少しは悪びれてください！」
「うーむ、なら専門用語を使えば――乳だよ？」
「言い方の問題じゃありません！」
「流行の言葉を用いるならば――パイ乙」
「それ、失礼ですよね？　私、怒ってもいいですよね！？」
「……早くいかないと学校遅刻するよ？」
「えぇっ、涼くんがそれを言いますか！？」

エルの叫びを切り目に、こうして僕の朝のおっぱい談笑は幕を閉じるのだった。

## 2　M学級崩壊

私立　神魔（かみのま）高校。

源荘より徒歩十分の場所にあるその学校こそ、僕やエルの通う高校だ。伝統こそあるものの――偏差値、中くらい。部活動成績、そこそこ。といったどこにでもありそうな校風だ。

特徴は、特徴がないのが特徴。そのせいか、昨今の少子化のせいかはわからないが、僕が受験する時も定員割れだったようだ。都市部に近いにもかかわらずである。

目立つものといえば、校門近くにある石碑。そこに刻まれている「変人こそ、天才だ」の言葉は、初代校長の口癖だったそうだ。

たぶん、校長が変人だったんだと思う。

ともあれ、僕がこの学校に通おうと決めたきっかけがそれだったのだ。

なぜ実家から遠いこの学校に進学しようと考えたのかと聞かれれば、思い当たる節は一つしかない。

僕は思った。

――こんな面白いことを石碑に刻む校長が建てた学校がつまらないはずがない、と。

僕の成績ならばもう少しレベルの高い学校に進学することもできたんだけど……

やっぱり、一度しかない青春。

謳歌するには、面白い学校に行かないとね？

ちなみにこのことをエルに伝えたら「そ、そんなことのために私は……！！」と何やら手と膝をついてうなだれていた。

うーむ、何かあったんだろうか？

教室に入ると、雰囲気に違和感を覚えた。

何というか、男女問わず騒がしい。皆それぞれが目を輝かせ活気

に満ち溢れている。女三人集まれば、姦しいというが――男が加わるとやかましいな。

「ねぇ、これどうしたの？」

僕は近くにいた悪友に声をかけた。

「おお、我が友、涼よ！」

「ごめん。僕、友達とは……」

「思ってなくてもそこは友達で通してくれよ！　申し訳なさそうな態度が逆につらいよ！」

悪友は悲痛そうに叫んだ。

ガラの悪そうな癖のある茶髪に、ピアス。ファッション雑誌を真似しましたと言わんばかりのチャらい容姿に比べて、心がピュアなこの男。

名を、紅蓮燐（ぐれんりん）。

名前負けとは、まさにこの男のことだろう。

そう、この男を一言であらわすなら、負け犬。

「……なあ、涼。ものすごく失礼なこと考えてないか？」

「うん」

「ちょっとは悪びれてくれよ！」

「だって負け犬は事実だし。否定できないよ」

「そ、そんなことねぇよ！　――お、お前らも何うなづいてんだ！！」

教室を見渡すと、ほぼクラスメイトの全員がうんうんとうなづいていた。

やっぱりみんなもそう思うよね。だって、燐だもん。

「――で？　次は誰にフられたの」
「ま、まだフられてねぇよ！」
「まだって……」

燐は学内にいる女子全員に告白して、全員に断られたという記録を持つ男だ。
ゆえにその実績をたたえ、負け犬と呼ばれている。偉大なる敬称だ。
今では他学区の女子にまで手を出そうとしているらしい。まあ、結果は見えているけど。
僕は心底不憫そうな目で燐を見つめた。

「そ、そんな目で見るなよっ。心が折れそうになるだろ！？」
「まあ、燐のことなんてどうでもいいけどね」
「ど、どうでもいいとか言うな。こっちは死活問題なんだよ！！」
「朝からテンション高いね。高血圧には気をつけたほうがいいよ？」
「誰のせいだよ！」
「まあまあ、落ち着きなよ。ストレスをためるとハゲるよ？」
「お、お前が言うなあぁぁぁぁぁ！」

ふぅ。せっかく朝からすでに息絶え絶えの燐に気を使ってやったのだが。
それにしても本当に不憫なやつだ……

「――はあ、相変わらずですね。それでどうしてみんな騒いでいるんですか？」

このままいっても踏ん切りがつかないと思ったのか、僕の隣に控えていたエルが自ら問うた。

それが救いの女神に見えたのか、燐は――
「おお、助かった！　さすが、ラファエ――」
何かを言おうとした。
だが、刹那のうちに燐は窓の外にいた。
遅れて聞こえるガラスの破砕音。
窓ガラスには人の形をした跡があり、エルはまるで何かを押したような体勢のまま固まっていた。
僕には何が何だかわけがわからなかった。
混乱する頭の中――だけど、一つだけ理解していることがある。
「ここ、三階だよね？」
呟いた時、窓の外にあった燐の姿は消えていた。
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「……」
姿の消えた燐の声が断末魔に聞こえたのは、気のせいだと思いたい。空耳だよ、空耳。
あ、そういえば騒ぎの理由聞いてないな。
「いったい何だったんだろうね？　――エル」
「え、あ、その――そ、そうっ、幻覚ですよ、幻覚！」
「？　僕はいったい何の「騒ぎ」だったんだろうね、って聞いたんだけど……？」
「あっ、そ、そうですね！　な、何の騒ぎだったんでしょうね！？」
「？？」

どこか慌てるような様子でエルは相槌を打った。
うーん、何か変なこと言ったかなあ……
結局、燐が帰ってきたのは昼休みだった。
全身にぐるぐると包帯を巻きつけ、よろよろとこちらに近づいてくる。ぱっと見で言うと、エジプト産のミイラにしか見えない。
「ええと、大丈夫？　ものすごく瀕死の重傷っぽいんだけど」
「あ、ああ。た、大したことねぇよ」
声をどもらせながらも、燐は問いに答えてくれる。
だけど、その視線は僕ではなく――エルのほうをチラチラとうかがっている。よく見ると、燐の身体はプルプルと小刻みに震え、その目はまるで猛獣に怯える小動物のように恐怖に染まっている。
そんな縮こまっている燐に、エルはにこりと微笑み、
「次は、ありませんよ？」
一言。
その言葉の意味を僕は理解できなかったが、対照的に燐は顔を青くさせ何度も、何度もうなづいていた。
次は、って何のことだろう？
「それで？　結局、朝はどうして騒いでたの？」
なし崩しに聞くことができなかった朝の「騒ぎの理由」を、僕は問うた。
「ああ、転校生が来るんだよ……」
「えっ、転校生？」

「ああ、そうだ――というか、今の今まで誰にも聞かなかったのか、もう昼休みだぞ？」
「うん。死んだ燐がうかばれないと思って……」
「し、死んでねぇよ！　生きてるよ！」
「ちっ、しぶとい」
「お前、ホント鬼だな！」
「――で、転校生の話は？」
「……」

疲れた顔をして燐は観念したようにがっくりと肩を落とした。
まったく、世話の焼けるやつだよ。

「――って、まだ来てないのか？　今日、転校してくるって話だったんだけど」
「そういえば来てないね？」
「ええ、来てませんね」

僕のふりにエルは首を縦にうなづく。
――同時に大きなおっぱいが揺れたのは、内緒だ。

「おかしいな……魔族の事前通告じゃ、今日のはずなんだが」
「マゾク？」

突然出てきたワードに僕は思わず首をかしげた。
マゾク――って、何？
そんな僕の反応に、燐は右往左往と慌てている。

「な、何でもねぇよ！　某学者の大予言ぐらいに何でもねぇよ！？」
「そ、そうですっ。ハヤシライスの「ハヤシ」の意味ぐらい何でもないです！」

……なぜか、エルまで一緒になって慌てていた。
二人の息の合った慌て方から察するに……僕にだけ隠すつもりだな？
そうとわかれば意地でもやってやる！
うーむ、マゾク、まぞく、マゾ……はっ！？

「――大丈夫だよ、二人とも」

菩薩のごとく澄んだ優しい目で僕は二人を見た。
わかってしまった……そう、わかってしまったから。

「世の中、確かにそういうことに偏見を持つ人は多い。けど、中にはありだと言う人はいっぱいいるから……」

――二人は「あれ」な人たちだったんだ……
――そんなことも知らず、僕は今まで……
心に込み上げてくる自らの悔しさを戒めるように、僕は言った。

「……鞭で打とうか？」
『M（マゾ）じゃねぇよ！』

恥ずかしいのか二人は声をそろえて否定した。
わかってるよ、僕は偏見なんか持たないから。君たちは――M族（マゾク）だよね？

「……」
『……』

昼休み、生温かく見つめる僕の視線が途切れることはなかった。

## 3　銀色の痴女

その日、噂の転校生が姿を見せることはなかった。

待っていても「来ない」と伝わった事実に、良くも悪くも盛り上がりをみせていたクラスメイトたちは皆そろって肩を落とし、残念そうにため息をついていたりする。それだけ転校生が来るのを楽しみにしていたのだ。その気持ちは痛いほどわかる……お預けにされたものほど欲しくなるというものだ。気分が沈むのも、憤るのも仕方のないことだと思う。

でもまあ、皆も落ち着きたまえよ。

僕が考えるに、登校する学校を間違えたのだ。うん、間違いないね。

そう、転校生さんはおっちょこちょいなのだ。

仕方ないよ、うんうんあるある。

ちなみにそれをエルや燐に話してみると「そんなこと実際にやるのは、涼くんだけです！」「ありえねぇよ！　どんな推理だよ！」と驚愕していた。

失礼な。僕は一回だけだよ？

放課後の下校時。

青春の汗を流すという名目の部活動や、より良い学校生活を提供するという名目の委員会に縁のない僕は、授業が終わるといつものようにエルと一緒に帰路についていた。朝の登校の時と同様――僕は源荘に帰り、エルは隣のマンションへと帰るため、それぞれの道は同じなのだ。

でも、なんというか――幼馴染と一緒に下校するのは、妙に役得感があるよね？

そんな他愛もないことを想いながら、僕はエルに話しかけた。

「――ねぇ、M(マゾ)」
「まだ引っ張るんですかっ、それ！？」
僕の呼びかけにエルは大げさなまでの反応する。その顔は驚きでいっぱいだ。
ちゃんと返事を返してくれないとは……やれやれ、反抗期かね。
「ねぇ、エル。聞いてもいいかな」
「ふ、普通に流されましたっ！」
エルの顔は驚きが二倍速だ。すごい。
僕は気にせず続ける。
「今日は来なかったけど――転校生さん、明日は来るのかなあ？」
「……気になるんですか？」
何気なく僕が問うと、なぜか急にエルはムスッとした顔になった。口をとがらせるその様子は、何だか拗ねているようにも見える。
？　転校生さんのことを聞いただけなんだけどなあ……
「いったいどんな人が来るんだろうね？」
「そうですね……どんな人でしょうね……まともな人がいいですよね……」
なぜか遠い目をして呟くエル。
えー、そうかなあ。僕としては面白いほうがいいと思うんだけどな。
「僕個人としては、宇宙人か、未来人か、超能――」

「それは絶対に言わせません！！」
「男の子かな？　女の子かな？　それとも、両方の人かな？」
「最後のは個人的に聞かなかったことにしたいです……」

声細々とげんなりとしていくエル。日ごろの苦労がたたっているのか、かなりお疲れのご様子だ。
だけど、もう一つだけ聞いてほしい。
――僕にはまだ気になることがあるのだ。

「これはエルにとっても重要なことだけど――転校生は、Ｓ（サド）かな？　それとも、Ｍ（マゾ）かな？」
「ぜんぜん重要じゃないですよね！？　というか、それはもう忘れてください！！」
「でも、Ｍの人だったらエルも、燐も仲良くできそうだね？」
「いやですよっ、そんな人とは仲良くできません！」
「あ、そうか。エルたちからすれば、Ｓのほうがいいよね。ごめん……」
「ちょ、何かこの謝罪は釈然としませんよ！？」

●○●○●○●○●○●○

エルと別れ、僕は自らの住居である源荘（みなもとそう）に帰ってきた。
築六十年の二階建てアパートである、源荘。
このアパートの主な特徴を言えば、とにかくボロい。本当に人が住んでいるのかと思うほど廃れている。柱は軋むし、瓦は今にも外れそうである。
例えて言うなら、紅蓮燐（ぐれんりん）だ。
やつのように全ての女性から見放されているとしか言いようのな

い存在。そしてこの源荘は、誰しもが毛嫌いするアパート。
つまり源荘と燐は似ているのだ。そっくりだと思う。特に誰も寄り付かない外観とか。
――だけど苦学生である僕にしてみれば、月の家賃一万円のこのアパートは最良物件だったのだ。
最初に家賃の話を聞いた時は耳を疑ったけど、いざここに来てみると納得がいった。
ああ、確かに一万だな、と。
苦学生といったけど、別に両親からの仕送りが少ないわけではない。
月五万、といえば高校生の一人暮らしにしたら多いほうだろう。
十分やりくりできるし、できている。
だけど皆さん、よく考えてほしい。

――ゲームとか、漫画とかほしいよね？

だから生活費はできるだけ削らないと、ね？
ゆえに僕はこの源荘に住んでいる。そう、華麗なる高校生活を送るために！

アパートの端に沿って二階へと続く階段を登り、僕の自室である「七号室」に向かう。
六畳一間のその部屋こそ、僕の家だ。
ようやく二階にたどり着き、突き当りの部屋のドアを開けると――

「……」
「……」

そこには……下着姿の女の子がいた。
身に付けているものといえば、ブラとパンツのみ。スカートを手

にしているところを見ると、どうやら着替え中のご様子だった。

「間違えました」

そう言って僕はすぐにドアを閉めた。

「ふう、危ない危ない。三秒ルールでギリギリセーフだね」

今のは二コンマ五秒くらいだったな、と安堵の息をもらす。

一歩下がって部屋の番号を見ると、「六号室」と書いてある。僕の部屋じゃない。

どうやら、間違えたようだ。まあ、よくあることだよ。

僕の部屋はその隣――突き当りの二つ目、七号室。

ドアが開く。

「いやあ、ひやっとしたよ……まさか、女の子が着替えてるなんて。ここがテキサスなら、僕はハチの巣だろうね」

「待って」

「OH！　イカスゼッ、ジョージィ。ナイスジョークだ！　HAHAHA」

「――あなたは、笹木涼？」

「……はい、そうです。ごめんなさいもうしません許してください」

開いたのは、僕の部屋のではなく、六号室のドアだった。そこから覗き見るようにひょっこりと少女が顔を出している。

……誤魔化しきれなかった。

くそぅ、どうしてばれたんだ！　ちゃんと三秒測ってたのに！

「そう。あなたが笹木涼……」

確かめるように僕の名を呼んだのは、銀色の髪をした少女だった。
何を隠そう、先ほどの下着姿の少女である。
エルの金髪と対になるような、肩にかかるくらいの短い銀髪。光の透き通るようなその色は、どこか幻想的で美しい。そしてそれを際立たせるがごとく、少女はさらに美麗だった。
ただし、その顔には「感情の波」といったものがまったくと言っていいほどにない。無表情という言葉は彼女のためにあるような気がした。

「今日隣に越してきた、リア。よろしく――涼」

まとめたように淡々と呟くと、リアと名乗った少女はドアを閉め、そそくさと自室へ戻っていった。

……

……

「……え？」

彼女がドアを閉めてから、たっぷりと僕はその場で固まっていた。
予想してた事態は当然、着替えのことで怒られるのかと思っていたのだが、本日からの隣人は何事もなかったかのように場を去ってしまったのだ。
この場に取り残された僕にはもう何が何だか、わけがわからなかった。
だって下着姿を見られて何も言わないなんて、まるで……はっ！？

「そうか、彼女は……痴女だったのか」

僕は……またも気づいてしまった。

――彼女、リアは見られると、興奮する人だったんだ。
今度、エルや燐に「変態仲間」として紹介してあげようと思った。

## 4　不可思議な神魔

何だかんだの葛藤と、幾人かの不幸と苦労を経て――今日もまた陽は昇る。

「転校生、あっ、学校間違えた事件」から日を跨ぎ、翌朝。

昨日と同じく、エルとともに登校すると――またしても、不自然なほどの喧騒に教室全体が包まれていた。

主だって特に今回は、男子がうるさいほどに騒いでいる。むさ苦しいこと、この上ない。

「ねぇ、これどうしたの？」

真相を問いただすべく、僕は近くにいた悪友に話しかけた。

「おお、我が友、涼よ！」

「ごめん。僕、友達とは……」

「わかってたけどさ？　絶対そう言われるのわかってたけどさ！？」

二度目にしてようやく伝わった真実に、悪友は悲痛そうに叫んだ。

友達に分類されない悪友こと、紅蓮燐（まけいぬ）は今日も今日とて、朝からテンションが高い。

「おい、涼。今、俺のこと負け犬とか考えなかったか？」

「うん」

「正直すぎるっ。というか、ホント少しは悪びれろよ！」

いつも通りといえる燐との他愛もないやりとりの中に、僕は既視感を思った。

――この会話、昨日もしたような……

「昨日、昨日……あ、そうだ。燐に紹介したい痴女がいるんだけど」
「何で痴女紹介すんだよ！　そこは普通、友達とかだろ！？」
「友達って……僕の知り合いにM（マゾ）の人は、エルぐらいしかいないんだけど」
『だから、M（マゾ）じゃねぇよ！』

僕の隣でおなじみの相棒――エルとともに、燐は疑いを晴らすべく必死に叫んだ。
しかし、いくら否定しようとも――事実は事実。僕のハートはそう簡単に心変りはできないよ。

「はあ……それで？　今回はまたどうして皆さん騒いでいるんですか？」

僕の生温かい視線に気づいたのか、はたまたこのままでは話が進まないと思ったのか、しぶしぶとエルは問う。
おお、デジャヴだ。ホントに既視感（デジャヴ）だよ！
最後に燐が神風に吹き飛ばされたら……！！

「ああ、それは今日こそ転校生が来るからだよ。昨日は不確定情報だったけど、今日のはちゃんとした筋からのだからな」
「へぇ、そうなんですか。確かに昨日は「待ちぼうけ」でしたしね」
「……」

……おかしい、まったくもっておかしい。
燐が提示した真相に、エルは納得したように相槌を打っている。
そして当然のように、その「巨」なおっぱいがプルンっと揺れた。
それはいい。確かに良い――いや、百歩譲ってすごくいいとしよう。

――だけど、僕はすごく納得がいかないのだ。

「おかしいよ！　どうして燐が三階から飛んでいかないのさ！？」

「いや、お前がおかしいよ！　何で俺が飛ぶんだよ！？」

僕の崇高なる目的――デジャヴは、ＫＹ（空気読めない）な燐の手によって無残に砕け散ってしまった。後もう少しだったのに！

胸の内に残る悔しさを視線に乗せるように、僕は燐を睨みつける。

「何で睨まれてんのか、まったく理解できねぇ！」

「はあ……しょうがないね。ホント、燐にはガッカリだよ」

諦め半分に僕は深くため息をつく。あーあ、期待してたのに。ホント、やれやれだよ。

そんな不貞腐れる僕の様子を燐は遠い目で見つめている。

「なあ、エルさんよ。この天然、どうにかしてくれんかね……？」

「すいません、私の力ではどうすることも……」

出来の悪い我が子を見る親の目をしながら、二人は細々と呟いている。僕がそちらを向くと、二人はばつが悪そうに目をそらしていた。

エルもなのか……やれやれ、二人ともわかってないね。

このままではまた話が進まなくなるので、大人な僕は話を続けることにした。

「それでさあ、どうして今日は男子のほうが騒がしいの？　昨日は同じくらいだったよね」

「転校生が女子だからだよ。男からしたら女子のほうが断然嬉しいからな」

「へぇ、だから男子はあんなに嬉しそうに騒いでいるんだ？」
「ああ」
当然だろ？　と言わんばかりに燐は仰々しくうなづいた。
なるほど、なるほど。確かに女子のほうが、男子的にはポイントが高いよね。主に目の保養にもなるし。
「転校生は女子かぁ――エルはどう思う？　やっぱり女子より、男子のほうがよかった？」
「……どうも思いません」
感想を問うと、エルは急に不機嫌そうに呟き、頬を膨らませ不貞腐れている。挙句、最後はプイっと横を向いてしまった。
？　僕、何か気に障ること言ったかなあ？
不自然な態度に思わず首をかしげていると――教室の引き戸がガラガラと開く。
「席につけー、チャイム鳴ってるぞー」
お決まりの文句とともに担任の先生が教室に入ってきた。
時間を見てみると確かに予鈴の時刻を回っていた。どうやら話し込んでいたせいでチャイムに気づかなかったらしい。
それは他のクラスメイトたちも同じようで、皆、慌てて自分の席に戻っている。
「えー、ＨＲを始める前に皆に転校生を紹介する。あー、喧しい、静かにしろー」
迫力のない先生の注意の声も耳に入らないようで、教室全体はスタートラインを切ったように騒ぎ始めた。

そりゃ、そうなると思う。
昨日は昨日で待ちぼうけをくらっているし、今日はそれだけ期待も膨らむというものだろう。
特に女子はともかく、男子。
僕の見間違いかもしれないけど、心なしかその目が血走っているように見える。転校生が女子だとわかっているせいなのか、やたらとテンションが高い。マウント富士ぐらいに高い。
ちらりとエルのほうへ目をやると、まだ、ぶすっと不機嫌そうな顔をしている。ご機嫌斜めのようだが……本当にどうしたんだろうか？

「あー、ま、いいか。とりあえず転校生、入れー」

諌めるのがめんどくさそうになった先生の声と同時に、教室の戸が開いた。
級友たちが息をのむ中で、悠々と歩を進め、転校生は入ってきた。
銀色の髪をした女の子。
風のように颯爽と登場した彼女は僕らのほうへ身体を向き直した。

「――リア、よろしく」

少しの緊張の色も顔に出さず、超簡易的なほどに自己紹介を済ませた。
唖然とするクラスメイトたちと、憮然とする転校生。だが、彼女のその碧眼は視線を外すことなく――ひたすらに僕に向かって据えられていた。
あれ、リア？　リアって、どこがで聞いたような……

「涼、昨日ぶり」

こちらに小さく手を振り、彼女は僕の名を呼んだ。あっ！

「君は……昨日の痴女！」

「……リア」

「そうそう、確かそんな名前だった！　ほら、燐！　彼女が君に紹介したかった痴女だよ！」

若干興奮気味に僕は、依然として口をポカンとさせて固まっている燐に声をかけた。燐の席は僕の左隣なので、非常に声をかけやすい。

何度かの呼びかけでようやくハッとした燐は――

「ベリア――」

「！！」

何かを言おうとした。

だが、刹那のうちに燐の姿は窓の外にあった。

遅れて聞こえてくるガラスの破砕音。そして、なぜか目の前には先ほどまで教壇にいたはずのリアがいた。

窓には人の形をした跡があり、リアは何かを突き飛ばしたような体勢だった。

突然起こった事態に、僕には何が何だかわけがわからなかった。

混乱する頭の中――だけど、一つだけ理解していることがある。

「デジャヴ完成だね」

とうとうというか、待ちに待ったことを呟いた時、窓の外にあった燐の姿は消えていた。

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

教室の窓越しに響いてきた燐の絶叫は、今度こそ断末魔だろうと僕は思った。
本当によくやったよ、燐。君の死は無駄にはしない。あらためて言おう、ＧＯＯＤ　ＬＵＣＫ、と。
ここからでは見えない燐の落ちたほうに向かって満足そうにうなづいて――僕は教室のほうへ身を翻した。

「……」

目に飛び込んできた光景――それは半数近くのクラスメイトが土下座しているものだった。
彼らは手と膝をつき、必死そうに地面に頭をすりつけている。
頭の下げられているほうを見ると、転校生こと――リアの姿がある。

「えっと……何の宗教？」

困惑する僕は誰にでもなく呟いた。「クラスメイトが土下座する」という光景はそれほどまでにありえなかったのだ。何これ、イタい。

「おすわり」

その虚言に答えたのは、リアだった。彼女は相変わらずの眉一つ動かない無表情。
おすわり――その言葉を聞いて、僕はある一つの考えに至った。
連想するのは、犬。しかしかわいいワンちゃんなどではない。
おすわり――それの意味するところは、一つしかない。
「なるほど……僕のクラスメイトたちはＭ（マゾ）だったのか。エルや燐だ

けじゃないとは……M度高いな、このクラス」
『M(マゾ)じゃねぇよ！』

僕の導き出した結論に、級友たちは全力で否定してきた。

「大丈夫、皆でやれば怖くないよ」
『お前のその発言が怖いわっ！』

僕の提示した立案に、全身全霊でクラスメイトたちが叫んだ。
はっきり言って僕には、それがとても言い訳がましく見えた。
若いって、怖い。

●○●○●○●○●○●○●○

津軽海峡冬景色、瀬戸内海鳴門大潮。言いたいことはたくさんあるけど――結論を言えば、僕は暇になった。
三時限目の終わりを告げるチャイムが鳴ると同時に女王様――もとい、転校生リアの周りには積みあがるように人垣ができていた。
彼女が転校生であることを考慮しても有り余るくらいの人たちが彼女の周りを覆っている。そこへ朝の一件で明らかになったM(マゾ)クラスメイトたちも混じって囲んでいるのだから、取り巻きはものすごく大きい。
ここまでいくとあれだね。取り巻きじゃなくて、エリマキ――天井裏代表のトカゲさんから進呈ものだよ。
まあ、そのせいもあってか、彼女の左隣である僕の席は見事なまでに埋まっているのだ。国土交通省もびっくりである。
ともかく、このままじゃお昼が食べられない。
基本、僕はお弁当派ではないので、購買でパンとか買えばいいん

だけど……いかんせん、問題はそこではないのだ。
いつも一緒に昼食をとるエルのところにいこうにも、彼女は相変わらずご機嫌斜めなままだし。こんな時しか必要にならない燐は朝のあれっきり帰ってこない。
つまるところ、誰もかまってくれないので僕は暇になった――というわけだ。
この状況をかっこよくいうならば――僕は暇を持て余している。
かっこ悪くいうならば――僕は本当に友達が少ない。

「はあ……仕方ない。ウロちゃんのところにでも行くかな」

●○●○●○●○●○●○

神魔(かみのま)高校現校舎に隣接するように場所を陣取る――旧校舎。
べつに「旧」っていうほど廃れているわけでも、昨今流行りのアスベストでも、耐震偽装があるわけでもない。むしろまだ新しいし、現在の校舎と比べてもさして遜色はないように見える。
これに「旧」をつけるなら、源荘には「古」をつけなければならないと思うほどだ。
だが、旧校舎には現校舎にない特徴というものがある。
それは屋根や壁といった外装に際立っている。外壁に描かれた星みたいな形の落書きや、建物全体を覆い尽くしているおびただしい無数の御札が圧倒的なまでの存在感を示している。
ヤンキーのトンネルスプレー落書きの比ではない。ヤンキーさんたちもここまでは頑張らないし、暇ではないと思う。
その他にもいろいろな理由はあるが、すでにこれだけでこの旧校舎は言い知れぬ不気味さを醸し出しているのだ。
先日、エルや燐を誘おうと声をかけた時も――

「絶対にいきません！　だってあそこにはドラゴ……何でもありません。とにかく絶対に近寄らないでくださいっ！」と強く注意される始末。
「馬鹿いってんじゃねぇよっ。それに旧校舎は封い……何でもねぇ。お前絶対に行くなよ、絶対だぞ！？」と何だか、行け！　と言われているような気がしないでもない燐の談。

しかし、どちらも必死そうな顔ではあった。
前から思っていたことだが――どうも二人はビビりさんらしい。大木さんほどではないが。
ともかく旧校舎は――誰も近寄らない場所なのだそうです。

校舎の中に入り、鼻歌交じりに廊下を闊歩（かっぽ）する。
扉を開けた時に「パキィィィン」と何かが割れるような音がしたのだが、僕は気にせず歩を進めている。だって壊れたものを気にしても仕方ないし。
建物の造り的には現在の校舎と変わらないので、非常に便利でいて、楽である。
灯りがついてないので少し薄暗いのだが――勝手知ったる人の家。何度も足を運んでいる僕にしてみれば迷ったりすることもないのだ。

「――確か、ここだよね？」

数えて五分も歩いてはいないが、僕は歩を止めた。
目の前には埃まみれではあるが、「校長室」と書かれたプレートのかかった部屋がある。他の教室などと比べても、あからさまにこだけ偉そうな空気が漂っている。
この不景気の波を無視した部屋の前で、僕は「彼女」を呼んだ。

「ウーローちゃーん！　あーそーぼー！」
「――やかましいわっ。というか、その呼び名はよすのじゃ！」

とりあえず待っていると、二秒もしないうちに勢いよくドアが開いた。
校長室の中から出てきたのは、一人の少女。
奪うように目を惹く炎色の髪は威厳の漂う華麗さを誇張し、髪よりさらに深い赤色の瞳は彼女の美しさをさらに際立たせている。確かにそれだけ見ると、圧倒されそうな感じなのだが。

「やあ、ウロちゃん。三日ぶりだね。どう、元気にしてた？」
「そういうお主は相も変わらずといったところじゃのぅ……」

室内に入って僕が軽く挨拶をすると、疲れたような顔をしてがっくりと肩を落とすウロちゃん。
うーん、挨拶が聞こえなかったのかな？

「本日はお日柄もよく――ウロちゃんも相変わらずロリロリな体型だね？」
「失礼なやつじゃな！　というか、前置き意味ないなっ！」
「拝啓、ウロちゃん――今日も素晴らしい幼女属性だね？」
「お、お主本気で容赦ないな！」

訴える幼女――ウロちゃんはびっくりしたように叫んだ。
しかし、彼女の体型はとにかく小さい。身長があまり高くない僕と並んでも、頭の高さが肩ぐらいまでしかないのだ。はっきりと言ってしまえば、幼児体型。局所的な流行である、「萌え」の対象だ。

「えぇい、いい加減にせいっ。とにかく！　妾の名は――」
「確か、ウールポロシャツだよね？」

「ぜんぜん違うわ！　ウロボロスじゃ、ウロボロス！！　誰がポロシャツじゃ！」
「惜しい」
「惜しくないわぁぁぁぁぁぁ！」

そうかなあ、僕は惜しいと思うんだけどな。だってウロボロスと、ウールポロシャツ――あ、夏によく着るよね、ポロシャツ。
名前を間違えられたことに憤るウロちゃんは、目を細めて睨んでくる。

「まったく、何故じゃ？　何故、お主のようなやつが『竜王』の能力を持っておるのじゃ……」
「え、今日はドロクエするの？」

聞き覚えのある単語に反応して僕が問うと、ウロちゃんは「はあぁぁ」と大きなため息をついた。
え、だって「リュウオウ」でしょ？　あいつは配合とか大変だよね。
ドロクエについて考えていると、ウロちゃんは渋々といった様子で話しかけてきた。

「……それで今日はどうしたのじゃ？　お主はいつもこんな時間には来んじゃろうが」

ウロちゃんが言うとおり、普段はこんな時間にここを訪れたりはしない。遊びに来るのは大抵、放課後の――学校が終わってからだ。
「ああ、うん。実はさ、僕のクラスに女王さ……Ｓ（サド）っぽい転校生が来てて、教室が騒がしくってさあ」
「ほほぅ、転校生とな？」

ウロちゃんは興味ありげに目を細めてくる。さすが、ギャルゲーマスターウロちゃんだ、『転校生』への反応がすごい。
どうやらウロちゃんも知りたそうなので、僕は続けた。

「儚げな銀髪で、何といっても美少女で……」
「ほぅ、ほぅ。定番じゃのう」
「そして極めつけは――貧乳」
「お主、本気でひどいな！　デリカシーとか知らんのか！？」

普通に転校生のことを話しただけなのだが、ウロちゃんは目を見開くほどに驚いていた。
えー、僕としては褒め言葉のつもりなんだけど？

「で、まあその女の子がまたすごくてさ？　おすわりと称して、クラスメイトの半数くらいを土下座させてたんだよ」
「何、土下座じゃと……？　それは皆を屈伏させていたということかの？」
「うん、まあ。皆、必死そうに頭すりつけてたし」

あごに手を当て訝しむウロちゃんの問いに、僕は首を縦に相槌を打った。
そんな僕を見てか、ウロちゃんはさらに怪訝そうな顔をした。

「……まさか、かのぅ」
「え、どうかしたの？　体調とか悪いとか」
「あ、ああいや、何でもないのじゃ。気にするでない」
「それならいいけど。まあ僕の見解を言えば、クラスメイトたちはM（マゾ）だね、間違いないよ」
「いやなクラスじゃな！」

険しい雰囲気が吹き飛んだ。
その後も旧校長室でお昼を取りながら、ウロちゃんといろいろ会話した。
プレイしたゲームはもちろん、ドロクエ。だが時間が足りず、結局、リュウオウは作れなかった……
再び転校生の話題が出たときに、ウロちゃんはまた眉間にしわを寄せ、険しい顔になっていたのが気になったけど……「ねぇ、ウロちゃんって、何歳なの？」「ふんっ、二千は軽く超えておるわ」「ふぅん、年季の入った合法ロリなんだね」「お主、すごいな！」……などとやりとりを交わしているうちにいつの間にか消えていたので――
幼女チョロイな、と思った。

●○●○●○●○●○●○●○

「どこへ行ってたんですか、涼くん？」
ウロちゃんのところから教室に戻った僕を待ち構えていたのは――エルだった。
さっきまで不機嫌そうだったのに今は向こうから話しかけてくる。
「ウロちゃんのところだけど？」
「ウロちゃん……？　誰ですか、その人」
やっぱりというか、ご機嫌斜めは継続中のようだ。
でもあんずることなかれ。僕はエルが不貞腐れている理由に察し

が付いているのだ！

「エル、気づいてあげられなくて……ごめん」

「なっ、急にどうしたんですか？」

真剣に頭を下げる僕に、エルは狼狽している。

だから無理はしなくていいんだよ。僕は……わかっているから。

「今日は……女の子の日だったんでしょ？」

「ち、違いますよっ」

「ま、まさかっ、妊し――」

「ぜ、ぜんぜん違いますっ！！」

火がついたように顔を真っ赤にしてエルは全力で否定してきた。

あれ、違ったの？

「じゃあ、どうして機嫌が悪いのさ。説明してくれないとわからないよ？」

「そ、それは……その……」

さらに顔の火を炎上させ俯くエル。

どうしたのかとエルの顔を覗きこもうとすると――不意に後ろから声がかかった。

「――涼」

声の主は、リアだった。

「どうしたの？　おっぱいが大きくなるコツをエルに聞きに来たとか？」

「……違う」

やけにその沈黙が長かった。そんなに気にしてるのか。
貧乳は貧乳で需要があるのに……もったいないなあ。
リアは一度エルのほうを見てから、僕に言った。

「話が、あるの」
「ここじゃ、駄目なのかな？」
「……」

反復させた僕の問いに口を閉ざすリア。
だんまりを決め込んでいるということは、ここでは言えないこと、ってことか。

「うん、わかったよ。じゃあ、今日僕の部屋に来てよ。隣だしね」
「わかった。それでいい」
「ちょ、ちょっと待ってください！」

先ほどまで意気消沈していたエルは、必死そうな形相に変わって話に割り込んできた。

「と、隣って、どういうことですか！？」
「ああ、そういえばエルにはまだ言ってなかったけど、リアは源荘の六号室に住んでいるんだよ」
「えぇっ、涼くんと同じアパートにですか！？」

驚愕を露わにしたエルは、勢いよくリアのほうを向いた。
そして――その激しい動きにＢＩＧメロンサイズのおっぱいが左右に揺さぶられる！

「うん、ナイスおっぱい！」
「もうっ、意味がわかりません！」
天に届くだろうか若き乙女の叫び声を最後に、タイミングよく予鈴が鳴り――昼休みは終わったのだった。

## 5　タイムセールと関西人

ドロー！　カッ、と目を見開き――僕は高らかに宣言した！

「魔法カード発動っ、「右手にエルを左手にリアを」！！　このカードの効果により――クラスメイトはＭ奴隷と化す！」

『ちょ、チート過ぎるうえに理不尽だろ！』

「し、しまった！　僕としたことが……クラスメイトたちはもともとＭ（マゾ）だったの忘れてた。くそぅ、ケアレスミスとは！！」

『その解釈は納得いかねぇよ！？』

うーむ、やたらと級友たちからの批判が多いな。

やっぱり、原作クラッシュに怒りを浸透させているのだろうか、と僕はクラスメイトたちの反応に思わず後ずさってしまう。

どうでもいいけど、マニア多いな、このクラス……

だがしかし、本当の問題は一向に解決していない。

「じゃあ、どうしたらそこ通してくれるのさ？」

教室の出入り口である二つの戸の前から動こうとしないクラスメイトたちの様子に、僕は口をとがらせる。

現在、放課後の下校時刻を回ったところ。

窓越しに眼下の校庭を見ると、すでに帰路へとつき始めている生徒もちらほらと見え始めている。

当然のごとく、僕も学校から帰るため、教室を出ようとしたのだが――なぜかクラスメイトたちがカバディの体勢で止めてきたのだ。

思わぬところでの挑戦だったが、僕も負けじと――カバディ、カバディ、カバディ。

「おい……何やってるんだよ、涼」
「当然、カバディだけど？」
「だから何でだよ！？」

いやだなあ、勝負を持ちかけてきたのはそっちからじゃないか。
スポーツマンシップを否定的な相手の態度に僕は首をかしげる。
えっ、カバディじゃないの？

「いや、カバディとかそういうことじゃなくてな？　お前はどうして、リアさまと一緒に帰ろうとしているんだ、って聞いてるんだよ――どうなんだ、涼？」

皆を代表してのことか、全身を包帯で包んだ男が聞いてきた。

「ええと、君、誰？」
「燐だよ、紅蓮燐！　普通、声とかでわかるだろうが！？」
「Ａｈ……Ｗｈａｔ、ｓ　ａ　Ｎａｍｅ？」
「日本語だよっ、俺、日本語でしゃべってるよ！」

情緒不安定な包帯の男はあろうことか、僕の悪友である紅蓮燐を称してきた。
貴様……ふざけたことを！！

「そんな冗談は止めてよ。紅蓮燐は……死んだんだから」
「生きてるよっ、ぴんぴんしてるよ！　――お、お前らも何残念そうにしてんだよ、ひどすぎんだろ！？」

男は慌てて顔の部分の包帯を外し、自らが燐だということをアピールしている。
出てきた顔が燐だということを確認してクラスメイトたちは、大

げさなほどにまで肩をすくめ、大げさなまでに深くため息をついている。中には、チッと舌打ちをかましている人もいた。
薄々気づいてはいたけど、皆は燐のことが嫌いらしい。
直訳すると、ウィ、アー、ノット、ラブ、ア、リン。字余り。

「それくらいにしておこうよ、皆。燐だって、僕たちの仲間だろ？」
「お前のせいだよ！　お前のせいで俺への不信感が積もりに積もってるんだよ！」
「皆、こいつは燐じゃない！　燐は自分のエゴを人に押し付けるほど無責任なやつじゃないよ！」
「おまっ、やめろよ！？　本気で信用がなくなるだろうが！」
「それは気にしなくても大丈夫だよ。すでに誰も信用してないから」
「お前ホントに容赦ないな！」

はぶられている事実を耳にした燐は、心の汗とともに叫んだ。
燐を信用してる？　はっ、笑い話にもならないよ。

「――どうでもいいですけど、涼くん。早くしないとスーパーのタイムセール始まってしまいますよ？」
「あ、そうだね。あそこのスーパーは急がないと売り切れちゃうから」

たしなめるように、僕の右側に立つエルが下校を促すよう言った。
そう、今日は最重要日用品である『卵』のタイムセールが四時半よりあるのだ。数限りある生活費を削らない（主にゲームの）ために、僕は何としても今日の特売でＴＡＭＡＧＯをゲットしなくてはいけない。
なのでこんなところで足止めを食うわけにはいかないのだ。

「ごめん燐、僕急いでるんだ。皆も今度また、かまってあげるから」

『子供扱いすんじゃねえよ！』

謝罪したはずの級友たちから最近の若者に多い、「一端に大人気取り発言」が返ってきた。現在はいい歳して親に怒られた時のニートが使うことが多いことで有名である。

はあ……クラスメイト、めんどくさいな。

「ねぇ、君の口からも何とか言ってやってよ――リア」

『！！！』

燐たちは「リアさまがどうのこうの」と言っていたので、当の本人にふってみたのだが……何で、皆顔色悪くしてるのかな？

少し持て余し気味な僕の呼びかけに、リアは即座にうなづいてくれた。

「……お前たち」

『は、はいっ、リアさまっ！』

口を開いたリアの声にクラスメイトたちは瞬時に姿勢をただした。僕としてはカバディのままでよかったのに。

お構いなくとばかりにリアは続ける。

「私、涼と一緒に帰るから」

「しかし、べ……リアさま。それでは魔王さまに申し訳が――」

何かを言いかけた燐の言葉をさえぎるように、リアは右手を前へとつき出した。

あれ？　リアの右手が青白く光ってるような……

「二度目は、言わない」

『ご、ごごご無礼をいたしましたぁ！！』

掲げられた右手を凝視して皆は見事というべきほどに土下座した。
ひれ伏したのを確認してリアは、右手を下ろした。
だけど――その手はやっぱり光っていなかった。
でもこの集団土下座、どこかで見たことあるような……あっ！？
こ、これはまさか！！

「皆の者、控えよ、控えよ！　ここにおわす御方をどなたと心得るか！」
『……』

そして、ここで印籠を懐から――

「あっ、急がないとタイムセールに間に合わなくなるよ。早く行かなくちゃ」
『やめんのかよ！　やるなら最後までやれよ！！』

どうやらクラスメイトたちは最後までやって欲しかったらしい。
水戸黄門、流行ってるのかな？
とりあえず、本当にめんどくさいクラスメイトたちだと思いました。

●○●○●○●○●○●○●○

荒れ果てた戦場。熾烈な猛獣たちとの死闘の末、僕らは宝具『ＴＡＭＡＧＯ』を手に入れた――
まあ、比喩はこれくらいにして……つまるところ、スーパーにて

卵を買うことができたのだ。しかも、何と三パックも！

「いやぁ、エルもリアもホントありがとね。卵はお一人様一パック限りだから助かったよ」

「いえ、それはいいんですけど……」

「べつにかまわない」

スーパーからの帰りの道で、僕は二人にお礼を言った。今回のタイムセール――二人なくして、この成果はなかった。

今月の生活費のことを思うと、感謝してもしきれないほどだ。

「いつもはおばちゃんたちの肉圧（パワー）に気おされてとれないんだけど、何か今日はスムーズにいったね」

通常ならば目の前に壁があるがごとく、おばちゃんたちの肉壁が僕の前に立ちふさがってくるのだが、今日はそれがモーセのなんとかのように真っ二つに割れていたのだ。まるでそこに僕たちを通す道ができたように。

「けどホントにラッキーだったね。一つ買えるだけでも儲けものだったのに、三つもなんて！　僕の機嫌もうなぎ昇りだよ」

「涼くんの機嫌はおいておくとして……でも、それっておかしくないですか？」

「えっ、何が？　普通にツイてただけだと思うけど」

「だって他のお客さんも、店員さんも明らかに「私たちに」土下座してましたし……やっぱり、おかしいですよ」

確かに一理ある。

そう――他のお客さんやら店員さんやらが皆、こちらを向いて土下座していたのだ。二つに割れた人垣はほとんどがそうだった。

でも僕は――

「僕は、奈良県の人たちが決まった時間に、決まった方向に礼をするやつの発展版だと思ったけど？」

「涼くんの解釈は斬新過ぎますっ！」

やだなあ、革新的といってよ。いつも見てます、ケンミンＳＨＡＷ！

ちなみに僕は、浄土宗なので礼はしません。

「そうじゃなくてっ……リアさんが転校して来てから、学校の皆もこんな感じじゃないですかって言っているんです！」

声のトーンが上がり、なおも憤慨したようすでエルは、リアのほうに目を向けた。

「無視しないでください、リアさん！　あなたのことを言っているんですよ！？」

「……」

どういった理由で怒ってるのかは知らないが、エルはリアを鋭く睨みつけている。

うーむ、まるで雌雄を決する、みたいな感じだ……何かあったのかな、この二人？

睨まれたリアはそれに対抗するかのように目を細めて、

「あなたには、関係ない」

「なっ！？」

言い放ったリアはどうでも好さそうにそっぽを向き、エルはそれ

を見て絶句している。
おぅ、喧嘩か？　おいおい、お二人さん。クールに行こうぜ、クールに。
「二人とも熱くなりすぎだよ。何があったか知らないけど、ヒートビズは社会の常識だよ？」
「……」「……」
お前こそ何言ってんだよ、と言いたげに二人は僕に冷たい視線を向けた。
やれやれ、そんなことも知らないのかい？　仕方ないなあ、僕が教えてしんぜよう！
「ゴホン……いいかい、君たち？　現在、地球は温室効果ガスによって地球温暖化が進み――」
「……」「……」
そうそう、それでＣＯ２が充満して――
「あっ、早く帰らないと、五時から放送の『おじさんといっしょ』が見られないよ。録画してないし急がないと」
「だからやるなら最後までやってください！」「（こくり）」
見事な鋭いデュアルツッコミ。
先ほどまでの険悪な雰囲気が嘘のように、二人は息の合ったコンビネーションを見せてくれた。そうそう、それでいいんだよ。
でも、デモンストレーションというか、僕への無茶ぶり多いな……
「でもさ、二人と――」
「やっと見つけましたで、お姫さん。えらい探さしてもろたわ」

二人とも仲良くなったね、と言おうとしたところで突然、僕の言葉は遮られた。
――電柱の上に立つ一人の少女によって。ええと、パンツ見えるよ？　というか、見えてます。黒いのが。
露出云々、そんなことお構いなしと言わんばかりに少女は、獲物を見つけた獣のようにリアを見据えている。

「これまではちょこまかと逃げてたようやけど、もう逃げられへんよ、姫さん？　チェックメイトや」
「……」

何も答えずだんまりとするリアと、対照的に舌舐めずりまでしている黒髪の少女。オリーブの丘でエロスと叫びたい。あ、メロスか。

「ええと、このストリッパー的なエロい人はリアの知り合い？」
「（ふるふる）」

絶対にこんなやつは違うと、何度もリアは首を横にふった。
そうか、知り合いじゃないのか……なら――

「ストーカー？」
「どうして両極端やねん！」

露出魔の少女はあろうことか初対面の僕にツッコミを入れてきた。
……うーむ、しかしなんだろうか。このむずがゆい感じは。

「おーい、お兄さんどうしてん？　もしかしてこわがっとるんか？」
「ああ、いや……うん、その」

尾崎節で言うと、うまく言葉にできない。
何というか、こう、噛み合わせが悪いというか、食べ合わせでおなかがぎゅるぎゅるみたいな――
「ははは っ、仕方ない仕方ない。普通、電柱の上にたっとる時点でそら、こわいわな？」
少女は笑いながらそう言う。……仕方ない？
そうかっ、わかった！　眼鏡の小学生風に言うならば――謎はすべて解けた！
「エル！　リア！　この変な人の正体は――えせ関西人だよ！」
『……』
瞬間、空気が固まった気がした。
しばらくして話の流れについていけないのか、二人はえせ関西人の少女のほうに冷めた視線を向けた。
「ち、違うわ！　うちは生まれも育ちも関西や！　何を根拠に」
「ほらそこっ、本当に関西人なら「違うわ」じゃなくて「ちゃうわ」だよ！」
ひどく慌てたように否定しているが、もう遅い。僕は違和感の正体に気づいてしまったのだ。
結論を言えば――この子、関西弁なめとるで！
どうして　＝　なんで。
どうしたの　＝　どないしたん。
仕方ない　＝　しゃあない。

「なんで、どない、なんでやねんの五段活用を知らないなんて……関西人が聞いてあきれるよ！」
「涼くん、それだと三段だけですよ……」

傍で聞いていたエルがぼそぼそとツッコミを入れてくる。そないやさけ東京もんは、と言ってやりたい気分だ。

「くっ、う、うるさいわ！　そんなんどうでも――」
「そこ、「やかましいわ」でしょ！？　やり直し！」
「ひ、ひぅ。や、やかましいわ」
「声が小さい！」
「や、や、やかましいわっ！！」
「それでよし。貴様はえせ関西人から、にせ関西人に昇格だ！　喜べ！」
「涼くん、関西弁の教官みたいになってますよ……」

心底呆れた顔をして、しみじみとエルが呟く。
まったくその通りだ。即席師匠とはいえ、不出来な生徒を持つと苦労するよ。
仮であっても少しだけ、誰にも彼にも差別しない関西のおばちゃんを尊敬した。

## 6　死神に会いました

余談だけど、古今東西日本最強である関西のおばちゃんたちは、秘伝の七つある必殺技の一つ、「知らない人でも間合い潰し」通称、たてまえブレイカーを得意としているらしい。

「あの、すいません。道をおたずねしたいのですが――」「あんた、うちいくつに見える？」「えぇと……四十歳くらい、かな？　それで道をたずね――」「いややわ、もう！　うち、今年で六十一やで？　うれしいわ、もう！！」「はは……それで道を――」「もう、おばちゃん気分ええわ！　たこ焼き連れてったるわ、たこ焼き！」「いや、あの」「近くにおいしいとこあるさかい、そこ行こか！　ほら、はよ！」「……はい」

おばちゃん、すごい。

「よ、いしょっ、と」

と声を上げながら、電柱を猿の木登り巻き戻しのように下りてくる少女。下を見ないようにと下りてくるところから察するに、相当のヘタレさんだということがわかる。

「――っと、ふぅ」

トン、という音が鳴る。ようやく地に足をつけたようだ。

黒髪のポニーテールに相対的な白皙の肌。つぶらな黒曜石のような瞳が印象的な少女。彼女の名は――えせ関西人改め、にせ関西人。

「違う……ち、ちゃうわ！　何勝手に作っとんねん！？　うちの名前は――」
「黙れ！　クソ虫な貴様の名など、にせ関西人で十分だ！」
「ひぅっ！　け、けど、うちは」
「どうした、声が聞こえないぞ、返事はどうしたぁ！」
「は、はいっ。さあぁ、い、いえっさあぁ！」
「……涼くん、もしかして教官をやるの気に入ったんですか？」
「気に入った」

満足そうに首を縦にふる。
そんな僕を見てエルは疲れたようにため息をついていた。そのさまはまるで、出来の悪い子を見る母のようだ。
えー、だってこの子すごくおもしろい反応するし、僕も教官やって楽しい。
今なら、スパルタで有名なヒトラーさんの気持ちが分かるかもしれない。
終始教官ごっこに興じる僕に、びくびくとしながら少女は――
「もう何やねん、あの兄ちゃん……心底、ようわからんけど、めっちゃ怖い……」

ぶるぶると震えながらに僕を見ながら呟いた。聞こえてるよ。失礼な、僕ほど人畜無害なやつはいないよ。
あっ、そういえば。
「えぇと君、名前なんだっけ？」
「兄ちゃんがそれ言うんかいな！」「涼くんが言うんですか！？」
「（こくり）」
おぉ！？

予想外の三人からのツッコミは、僕への集中砲火となった。
名前を聞いただけなのに、なぜだ……
衝撃の出来事に驚いている僕の反応をみて、三人は大げさにため息をついていた。
「はあ……うちの名前は、グリム・リッパーや。よろしゅうな」
仕方なくとか、渋々といった様子で少女は名乗ってきた。
「うん、わかったよ。君は――グリム・にせ関西人・リッパーさんだね？」
めが、かっこいい。
「ちょ、ちょっと待ちいや！　何か間にいらんもんはいっとるで！？」
「えぇ？　でもこっちのほうがよくないかなあ、キザカッコヨス」
「どこがやっ、時代錯誤関係なしにダサすぎるやろ！？　どんなセンスしとんねん！」
どうやらグリムさんと名乗った少女は、この名前は納得がいかないようだ。えー、最近はミドルネームとかあったほうが何かと便利でいいよね？
笹木・D・涼とかだったら、海賊王になれそうな気がするし。
「ああ、もう！　この兄ちゃんと話してたら、全然先に進まれへん！　まるで底なし沼や！」
「言い得て妙だと私も思います……」
む、エルまで裏切るとは。僕の背中は貴様には預けられんな。

僕への罵倒を言い切った後、なおも憤慨した様子でグリムさんは、
「とにかく――うちの用があんのは、あんたや、姫さん！」
びしっとこちらに指を向けた。
貴様、人に指を向けるのは失礼な行為と知っての狼藉か！　君のお母さんに言うよ！？
「……」
「ほう、シカトかいな。自分から名乗るつもりはないようやな……なら、うちが言うたるわ」
ニヒルな笑みを浮かべグリムさんは、大げさというほどに前ふりをした。こ、このまますべったらどうするつもりだろう！？
場を埋め尽くす緊張感。
プラス、僕の期待と心配。芸人の親の気持ちが痛いほどに分かる。
「ならず者ぞろい、群雄割拠の魔界を統べる王、魔王が一子――」
ポエムのようにグリムさんは続ける。
「魔王の数多くいる子の中で、王位継承序列一位。今や、次代の王にいちばん近いとされる――」
ごくり、と僕は唾を飲み込んだ。
「――魔王の、そして魔界の姫。あんたのことや、ベリアル！」
グリムさんはびしっ、とまたこちらを鋭く指す。
ベリアル……か。

なるほど、話はわかった。つまりは――

「つまりは……僕のことだね」

「なんでや！？」

拉致外の発言にグリムさんはこれでもかとばかりにツッコミを入れた。

えー、そんなこともわからないの？

「だって、ベリアルの「リ」は、笹木涼の「り」だよ？　常識じゃないか」

「だから、どうしたいうねんっ！　全然意味わからんわ！」

「いや、だからね？　「り」が一文字かぶってるから――」

「言うてることがわからんいう意味違うわ！　そんなんどうでもええて言うとんねん！！」

ぜぇ、ぜぇ、と息をきらし、一人ツッコミ運動会を終えたグリムさんはこちらをにらんでくる。

もしかして僕、また何か悪いことしたかな？

「もうえぇわ、兄ちゃんに付きおうてたら、日が暮れてまう……」

目に見えてげんなりとしたグリムさんは一人、小さく呟く。

そしてもう一度、意を決したように、こちらを向いた。

「わかっとるとは思うけど……銀髪のあんたや！　ベリアルさん、単刀直入に言うわ。あんたの命、うちがもらいうけるで！」

「つまり、僕の――」

「せやから兄ちゃんとちゃう言うとるやろっ！　どこが銀髪やねんっ、真っ黒やないか！」

怒られた。
どうやら、またしても御呼ばれは僕ではないらしい。おかしいな……ベリアルの「リ」は、笹木涼の「り」なのに。ペリーの「リ」も、僕の「り」なのに。
名残惜しい心のままに、左隣に控える彼女へと視線を移す。
確かグリムさんは、「銀髪の」って言ってたから……

「何か、君のことだ、って言ってるけど？　――リア。そこのところどうなのさ？」

僕たち三人の中に銀色の髪は彼女しかいない。
しばらく口を閉ざしていたリアは少しの沈黙の後、重々しく口を開いた。

「……私がベリアル」
「いいや！　僕がベリアルだっ、絶対譲らないよ！」
「兄ちゃんは黙っといて！」「涼くんはしゃべらないでください！」

本命のグリムさんだけでなく、味方のはずのエルからも怒鳴られた。とてもこわい。
どれくらいこわいかというと、東北にお住まいのなまはげさんぐらいこわい。大阪府にお住まいのたむけんさんの獅子舞はこわくない。

「ああ、もう！　これから兄ちゃんは無視するっ！　付き合ってられへんわ！」
「きわめて賢明な判断です」

憤るグリムさんの声にエルは同類を見るような目を向けて、うん

うんとうなづいていた。
え……そんなに僕、邪魔かな……？　千年祭の後、都を追われるせんとくんの気持ちがわかった。
「よっしゃ、いくで！」
「いってらっしゃい、あなた」
……
ウソだろ……ホントに無視されたっ！？
「出でよ！　死神鎌（サテュルヌス）！」
すると、グリムさんの叫ぶ声とともに地面から一本の大鎌が出現した。
黒く、どこまでも黒い色をしたその鎌。柄のほうからのびる長い鎖、二メートルはあるだろうか。
でも見た目はかっこいいけど、なぜかひしひしといやな感じが伝わってくる。すぐにでもこの場から離れたいと思いたくなるような……
「そんな、まさか……死神っ」
そう呟いたエルは、目を見開くほどに驚いていた。
え？　シニガミって、何？　下敷きなら持ってるけど。
「姫さん、うちはあんたに恨みはあらへんけど――」
そう言いながらグリムさんは、身の丈より大きい鎌をぶんぶんと振り回す。そして――

「ほんまにすまんな。こっちも仕事やさかい、堪忍してやっ！」

――地面を蹴って、こちらに飛んできた。

僕の脳裏に浮かぶのは、昨日見たアクション映画のワンシーン。

うーむ、これは……

「ねぇ、エル。これ、写メ撮ったほうがいいかな？　マトリックー」

「いいから避けてください！」

怒鳴るようにエルは普段ありえないぐらいの大声でそう叫ぶと、懐に僕を抱え、跳躍した。

直後、僕らが先ほどまでいた場所は、つんざくような破壊音とともに、大きなクレーターと化していた。

## 7　鱚とキスは別物

ドゴォォォォォォンっ！

小規模竜巻のような風圧に乗り、辺り一帯に立ち込める砂煙が視界から自由を奪っていく。

前後左右さえ見ることのできないこの状況で唯一あるのは、聞こえるのは――音だけ。

そう、声だけだった。

「ははははっ、どうしてん姫さん？　何の抵抗もなしやとさすがにうちも良心の呵責が許されへんのやけど」

「……」

「ハッ、まだ無視すんのかいな。この期に及んで、まだ頑固とは。言っとくけどな、いくら姫さんとはいえ、この鎌で傷をおったら死んでまうんやで？　まあ、そないなことうちが言うことやないんやけどな」

「……」

「はあ、ならあの姉ちゃんか？　違う。うちが思うに、そうやな……あの兄ちゃんを殺せば、うちのこと憎いとか思うてくれるんか？　ほしたら先に兄ちゃんを――」

「涼には、手を出すな！」

「やっとというか、何や姫さん、大声も出せんのかいな。あんたは典型的な無口やと思っとったわ。でも――この場でそれは命取りやで？」

「！！！」

ザッと地面を蹴るような音がした後、大きく風を凪ぐ音がした。

ブォン、と何かを鋭く振りきったような音。

「我ながらに卑怯やとは思っとる。でもな、お互いに視界の悪い場所で大声なんか出したら、場所なんか丸わかりやんか。あんた、そんなこともわからんかったんか？」

たやすく詰（なじ）るようなグリムさんの声が聞こえた。

嘲笑うような、あるいは侮蔑しているような含みを感じさせるその声が。

さっきまでは確かにあったリアの声は……聞こえなくなった。

●○●○●○●○●○●○●○

むにゅぅ、とした感触が僕の身体にあたっている。すごい、やぁらかい。

人類の至福を感じさせるそれは僕の本能を、青春の熱いリビドーを刺激している。

そう、これは――男として語らずにはいられない！

「おっぱい――女性の胸の総称。A、B、C……大きさや形は確かに違う。だがそれは人類、いや、全生物における英知の結晶。やわらかく、それでいて温かささえ感じさせるそれは、まさに……神秘の玉手箱やぁ！」

「ちょ、少しは自重してください！」

ぎょっと形相を変えたエルは、男の性を語る僕を抱えながらにそう叫んだ。エル……彦〇呂さんはすでに自重しているよ。そう、どこまでも続く果てしない空のように広い芸能界で――

「……うん？」

過去経験したことのない浮遊感に駆られ、怪訝に思った僕は僕はふと下のほうに目を向ける。
今、僕の両足は地面についてないし、砂埃で見えにくくはあるが、さっきまであった辺りの風景が全部下に見えている。
今、気づいた。
現在僕は――空に浮いている。というか、

「飛んでるよっ！」
「今さらですけどね……」
「ははははっ、飛べない豚はただの豚！　飛べるエルはただのエル！」
「何でしょうね……こう、ものすごく失礼なことを言われている気がするんですが！？」

初めての体験に興奮気味の僕の声に、エルは相変わらずの区々（まちまち）なテンションである。
え、何でそんなにテンション低いの？　飛んでるんだよ？　ライト兄弟もびっくりだよ？
イエスに代わって、僕はジーザスと叫びたい。

「金髪の姉ちゃん……あんた、人間とちゃうかったんやな。まあ何となく感じてはおったけど」

依然とたちこめる砂煙。
飛行中の僕らの真下にできた大きなクレーターの中で、眉間にしわが寄ったままのグリムさんが口尻を上げて、呟く。
しかし、グリムさんの倦怠そうに向けられた表情にも、エルは憮然とした表情で、
「そういうあなたもですよね？　――死神さん」と皮肉そうに口を

歪めた。

笑いながら、そして黒いオーラを撒き散らしながら会話を交わす二人。

うーん、何やら楽しそうだ。うらやましい。

「ねえ、ねえ。僕も混ぜて？」

「涼くんは静かにしていてください」「兄ちゃんは黙っといてくれるか？」

仲間にしてほしそうな目をする僕のほうを見向きもせず、二人は真剣な表情で睨みあっていた。

笹木涼　を　仲間にしますか？　　はい／いいえ

エル　と　グリム　は　いいえ　を　選択

笹木涼　は　悲しそう　な　顔　を　した……

いじめ、かっこわるい。

「その白い翼……天使か。それも八枚羽の天使長。姫さん追っかけてただけやのに、こら、えらい大物が釣れたわ」

「御冗談を、あなたもそうなのでしょう？　大鎌を持っているのは、死神長ということだったはずですから」

腹を探り合うための交わされる二つの言葉。

お互いを値踏みするかのようにぶつかり合う二つのまなざし。

両者ともにわずかにも隙を見せない、そんな確固たる意志が表情に垣間見えていた。

「ああ、その通りや。一応、姫さんは魔王の姫ってことでＶＩＰやったし、形式的にうちが出てきたわけやけど……まあ、そないな気遣いも必要なかったけどな」

そう言うと、エルに見せつけるように自分のもつ大鎌に付いた液体をビュっ、とふり払った。

「その、リアさんは……どうしたんですか？」

言葉に詰まりながらもエルが問う。心なしかその声が震えていた。

「感触に手ごたえはあったしな。それに、この鎌に切られたら魂ごとばらばらになるし……な」

「……そうですか」

悪びれる様子など微塵もなくグリムさんがそう答えると、エルはそっと目を伏せた。

「――それでや」

会話に仕切りを入れるような声。

声の主であるグリムさんは再び鋭い目でエルをにらむ。

「どないするか、天使長？　あんたらからしたら、魔族の姫さんはどうでもええんやろうけど、うちは死神や。あんたらの忌み嫌う存在、や。……何ならここで戦ってもええけど」

ジャリ、と長い鎖を鳴らし、大鎌をかまえた。

別にやるならやってもいい、とまるで誘っているかのように。

好戦的な態度をとるグリムさんのそんな様子に、エルは左右に首を振った。

「いいえ、遠慮させていただきます。私としては本意ではありませんが……一般人の涼くんを巻き込むわけにはいきませんし。あなたもおわかりのはずですよね？」

と、エルは僕を見る。

女神のような慈愛に満ちた、そんな顔で。

普段の僕ならここで「おっぱいで顔が見えない」とか言うはずなんだけど……なぜか、言葉に詰まってしまった。

エルの。その――わが子を守る母のような、そんな顔をされたら。

「……まあ、そっちがええんやったら、うちはええけど」

キョトンとした表情を見せるグリムさん。

数秒の沈黙の後、何か腑に落ちない様子で大鎌を退いた。

「ほんまにええの？」

「何度も聞かないでください、私の気が変わらないとも限りませんから」

わかりきった答えの二度聞きを、エルは機嫌悪そうに返す。

それを聞いてグリムさんは、ほっ、と一息つく。そして踵を返す。

「そしたら仕事は済んだし――ほな、遠慮せんとうちは帰らしてもらうわ。兄ちゃんも悪かったな。もう会わんと思うけど達者でな」

グリムさんは最後に僕のほうを向いて、地面を蹴り、飛び去っていった。

その後、少しの間があく。
二人だけが残ったその場には何か言いづらい、ばつが悪い、そんな空気が漂っている。
わけのわからないことだらけの状況から、ようやく落ち着いた僕はエルに話しかけた。

「……ねぇ、エル」
「何ですか、そんな藪から棒に？」
「さっきから思ってたんだけど……背中から羽、生えてるよ？」
「ホント今さらですよね、それっ！？」

シリアスな空気が吹き飛んだ。

●○●○●○●○●○●○●○●○

宇宙でもないのに浮遊体験をしていた僕は、エルとともに再び地面に足をつけた。帰ってきたよ、地球よ。

「さあ、エル！　洗いざらい白状してもらおうか！」
「いきなりですね……それにすごいテンションですね」

ぼそぼそと何か言っているが、僕にはそんなことどうでもいい！
ジャケットのいちばん上のボタンくらいにどうでもいい！

「エルは僕に言わなきゃいけないことがあるはずだよね！？」
「それは……」

追及に口ごもるエル。
なおも必死に僕は彼女に訴える。
「たった二人だけの幼馴染でしょ！？　こういう隠し事はなしでいこうよ！」
「……」

そう、僕たちは幼馴染。
いつも、何でも一緒だった。
だからこそ、こういうことはちゃんとしたけじめをつけて、キチンとしておきたい！

「タイムセールで買った僕の卵、どこやったの！？」
「えぇっ！？　そっちですか！？」

思わず仰け反るくらいにエルは思いっきりに驚いていた。
そっちって、なんだよ！　僕にとってはそっちがこっちなんだよ！　のっち、どこいったんだよ！

「はあ……わかってはいましたけど、涼くんは本当にすごいですね」

一周回って、呆れたような顔でエルが呟いた。
ふん、今さらほめたって僕は騙されないぞ、このヤロ～。ほめて、もっとほめて。

「僕はほめられてのびる人だよ？」
「自分で言う人初めてみましたっ！」

やだなあ、偉大な先達たちがいるじゃないか。決して口にはできないのだけれど。

「涼くんは本当に……というか、さっきのこととかはスルーなんですか？」
「さっきのことって？」
ツバメ返しではなく、オウム返しがごとく、僕は問い返す。
返答に詰まったのか、苦い顔をしてエルは眉をひそめる。
「ほら、死が……グリムさんのこととか、その……私のこととか」
必死にというか、えらく継ぎ接ぎにではあるが、エルは呟いた。
うーむ、そのことか。
さっきの地面が吹き飛んだりとか、空飛んだりとか、羽が生えていたりとかのやつ。
「うん、大丈夫。それはもうわかってるから」
「え、そうなんですか？」
キョトンとするエルの問いに、僕は当たり前のようにうなづいた。
なんだそんなことか、と。
僕は何気なく――
「中二病だよね？」
「あれだけのことがあってそれが言える人も初めてみましたっ！！」
驚愕の色に顔を染めるエルは一息で叫んだ。すごい早口です。
「そんなことより、卵だよ。せっかくタイムセールで買えたのに。ここでなくなったら意味ないよ」
「そんなこと……ですか……？」

「うん、そんなことだよ。所詮はね？」
張り裂けてしまった場の雰囲気にエルは肩を落とし、大きくため息をついていた。
えー、卵、大事だよね？　ポケ〇ンとかでも。
生存本能の赴くままに、僕はきょろきょろとＴＡＭＡＧＯを探す。
排水溝、ない。電柱の裏、ない。畑の中、あっ！　ミュ〇のタマゴ！　でもいらない。
「ないなあ……卵……どこいったんだろ」
悩ましげに僕はおもわず、ため息をついてしまう。
一度、どこでなくしたんだろうか、と振り返ってみる。
スーパーを出た　↓　三人で帰っていた　↓　えせ関西人が現れた　↓　飛んだ　↓　……なくした
うーん、問題は出るとき誰が卵を持っていたか、だけど。……そうだ！　確か――
その時。不意に後ろから声がした。
「……涼」
透き通るような銀色の髪に、少しの濁りもない純白の肌色を持つ少女。
そこにいたのは――リアだった。
夕日を背に立ちすくんでいる彼女のその手には、タイムセールでゲットした卵パックの入った袋をしっかりと握っている。
生き別れの妹に会う兄のごとく、僕は急いで駆け寄った。
「リア！　卵！　どこいってたのさっ、心配したんだよ！？」
「それ、卵も一人に入ってますよね……」

僕の後ろを追ってきたエルがさりげなくツッコんでくる。
そんなことはいいんだ。今は卵とリアのの生還を喜ぼう！　いやあ、ほんとによかった。

「いやあ、リア。卵持っててくれたんだね。ホントにありが――」
「――涼」
「え？」

名前を呼ばれ僕は顔を上げて、リアのほうを見た。瞬間。
口を――ふさがれた。
あたたかくて、やわらかい。
優しくほのかに香るシトラスのにおいとともに……彼女の唇によって。

## 8　シュラヴァルハラ

キスをされた。
呆然と立ち尽くす僕の頭がそれを理解したのは、彼女の顔が離れてしばらくしてからのことだった。
キス、鱚、キス、鱚、キス……

サカナくんA「ぎょ、ぎょ！？」
サカナくんB「ぎょ、ぎょっ、ぎょ！」
サカナくんC「ぎょ、ぎょ、ぎょっほっ！？　げほっ、ごほ！
……風邪かな」

「な、な、な何をしているんですかっ！」

狼狽を含んだその声で僕は我に返る。
あぶない、あぶない。もうちょっとで、リアルさかな天国にいくところだったよ。
声の主であるエルは、先ほどまで固まっていたのだがようやくというか、僕たちのほうへ詰め寄ってきた。
そして般若よりも怖いだろう表情で、僕とリアの間に割って入ってくる。怖い。

「リ、リ、リアさん！？　い、今のはいったいどういうつもりですか！！」
「端的にいえば、ぺーぜだよ？」
「涼くんには聞いていません！」

怒鳴られてしまった。ぺーぜって、キスのことだと思ったんだけど……もしかして違った？

「もしかしたら……人工呼吸、かも？」
「どうして疑問形なんですかっ。というか状況的に絶対必要なかったですよね！？」
「イチゴ味じゃなかったよ？」
「そんなことは聞いてません！！」

ものすごく怒鳴られてしまった。
昔の人たちはファーストキスは、レモンやら、イチゴの味がするとか言ってたけど、嘘だね。おいしくなかった。僕はブルーハワイ味がよかったのに……
ものすごい剣幕をはらんだ目でエルは、先ほどからどこ吹く風を決め込んでいるリアを睨みつける。

「リアさん、いえ、ベリアルさん！　どうして涼くんにあんなことしたんですか！」
「……あんなこととは？」
「え……？」

わずかに首をかしげ、キョトンとして問い返すリア。

「い、いや、それは……その。キ…ス、というか、チ……チュウ…というか……」

本人としても思わぬ返しだったのか、エルは顔を真っ赤にさせながらもじもじとしている。
やっとの思いでせっかく編んだ言葉も声の小さな呟きとなってしまっていた。

「その……つまり、は……」

「――ぺーぜのことだね？」
「実際問題そうですけど、涼くんは表現が直接的すぎます！」
小学生レベルの恥ずかしがり屋さんであるエルは赤面のままに叫んだ。真っ赤になったその顔は練馬のポストくらい赤い、品川ほどではないのだが。
言い切った甲斐があったのか、どうやらリアには伝わったようで、
「もしかして、キスのこと？」
「そ、そう！　そのことですっ、それが聞きたかったことです！」
意気消沈していたエルは水を得た魚のように復活した。まるで芸能界の波に打たれた魚人界の英雄、サ〇ナくんのようだ。
勝手なその様子を気にするでもなく、リアは言った。
「……確かめたの」
「確かめた？　いったい何を確かめたというんですか、キスに関係ないですよね？」
至極曖昧な答えにエルは怪訝そうにリアを見る。
しかし相変わらずというか、彼女の顔に表情らしきものはない。そして相変わらずの貧乳。
「……それは」
「僕のくちびるの味をだよ？」
「そのためにキスするとかどれだけ変態の人ですか、それ！？」
エルは、ぎょっとしてリアから距離をとった。ひどい。
「失礼だよエル。ちなみに僕は甘めのほうが好きだよ？」

「えぇ、涼くんの性癖だったんですかっ！？」

表情をひきつらせたエルは僕からも距離をとった。M（マゾ）の人に言われたくない。

しばらくの弁解の後、僕にもリアにもそんな性癖はないということを信じてもらうことができた。

最初はそれこそ、遊園地にいるキグルミのお兄さんの反応を見る大人のような視線だったけど。夢の王国のネズミさんも大変だと思う。

「もう！　涼くんは肝心なところで邪魔しすぎですっ！」

「僕は、邪魔シーマンだからね？」

「何か、脇役っぽいですっ！」

人面のお魚さんに謝れ。

「……王の」

「え？　何か言った？」

ぼそりとリアが口を開いた気がする。だがしかし、聞き取れないほどの呟き。

訝しげに思った僕とエルは、再度問い返すように声を上げた。

「魔王の力を、確かめた」

今度こそはっきりとした口調でリアは答えた。

マオウ？　うーむ、魔王、か……

「うーむ、確かに僕は皆から、『昼の魔王』と呼ばれているけど……それと何か関係が？」

「関係とか依然に、何かいやらしいですっ！」
不潔ですっ、とエルは叫んだ。
うーん、僕の学校での呼び名なんだけどなあ。まあ理由は知らないんだけど。
リアは続けて言葉を紡ぐ。
「涼の中、魔力がいっぱいあった。だから魔王。私の婚約者」
「ち、ちょっと！　ちょっと待ってください！　い、今何て――」
「はい、タイム入りましたぁ！」
「気が散るので涼くんは黙っていてくださいっ！！」
怒られた。まともにかまってもらえなくて、ちょっぴり傷ついた今日この頃です。
黄昏に浸る、そんな僕を無視してエルはリアのほうに向き直す。
「こ、こ、こ、こ、こ婚約者とは、どういう意味でしょうか？」
ひきつり気味の笑顔、噛み噛みの言葉でエルはたずねた。必死に取り繕ろうと努力しているようだがひきつった表情がまったく隠せていない。
あごに手を当てるリアは一瞬の沈黙の後、ゆっくりと口を開き、答えた。
「涼は私の許嫁。魔王の後継者、だから――」
「え？　何、どうしたの？」
言葉をいったん切ってリアは僕のほうへ目をやる。
ただの一般市民である僕を見つめるそのまなざしがやけに真剣そうだった。含むことなく、そして言い放った。

「涼は私のもの」

せめて……僕の価値は、プライスレスといってほしかった……

●○●○●○●○●○●○●○

まあ、そんなこんなで現在に至るわけでして。

路地の真ん中で言い争うことは大変邪魔極まりなかったので場所を移して、源荘七号室。

通称、僕の部屋。正式名称も僕の部屋。

すでに廃れていることで有名なこのアパートにて、先ほどの論戦の続きが行われているわけだけど……

「……涼は魔王。決定事項」

「だから、そんなのずるいって言っているんです！　それに私たちは幼馴染ですよ！？」

「私は、転校生」

「うんうん、ギャルゲー萌え要素としては、いい勝負。つまりは互角だね？」

「涼くんは黙っていてください！」「黙ってて」

邪魔者扱いというか、なんか最近こういうの多いな、と僕はしみじみと思った。人生に悩めるアラフォーサラリーマンの気分だ。

反論するエルは思い出したように切りだす。

「だ、だいたい！　私と涼くんは小さいころからずっと一緒だったんですよ！？　遊びも、食事も、その……お、お風呂も……」

「一緒に入ってたよね？　小学校の――」
「っ！！　と、ともかく！　どっちにしても私のほうが先に涼くんと接触しているわけですし、後から出てきたあなたの出る幕はないんですっ！」

具体的な事情を話そうとする僕の言葉をさえぎり、エルは必死そうに叫んだ。

「り、涼くんには、神に……後、私の…旦、那さんにも……」

彼女の顔は火を噴いたように真っ赤になっていた。
小さすぎて僕には聞こえないぐらいの呟きだった。しかし、頑なに断固としていたリアも黙ってはいない。

「涼は私のもの。これは、魔界の総意。だから、絶対」
「そんなの私だって、主神や神族たちの決定で来ているんですっ、だから絶対に譲りません！」

ぐぬぬぬ……とうなり声が聞こえて来そうなくらいに二人は熾烈ににらみ合う。バチバチと火花さえ飛び散るがごとくだ。間の火で花火したいくらいだ。

「というかさ、聞きたいんだけど……」
「はい？」「何？」

何気なくついた僕の呟きに、二人はくいっと顔をこちらに向ける。

「えぇと、はっきり言うとだね……何の話だっけ、これ？」
「今までわかってなかったんですか！？」
「うん、ぜんぜん」

迷うことなく僕はコクリとうなづく。
それを見てエルも、リアも顔を見合わせ、途端に深々とため息をついていた。
人間、ため息をつくと幸せが逃げていくらしい。マメ知識だよ？
やれやれと言った様子でエルは「いいですか？」と前置きをして、僕に話し始めた。

「この世には、人間の住む『人間界』のほかに、『魔界』、『天界』、『地獄』という世界があるんです。ここまではいいですね？」
「ふむふむ」
「そしてそれらの世界を統べる者。魔界から順に『魔王』、『神』、『死神』と呼ばれる者たちが支配しています。私、リアさん、後グリムさんとかがそうです」
「……ふむ」
「魔を統べる魔王は神に仇なすもの。天を統べる神は死神を滅するもの。死を統べる死神は魔王を死へいざなうもの、とこの関係性は似て非なるものですが、じゃんけんに似ていると言っていいでしょう」
「……」
「まあ、他にも例外はありますが、とりあえず今は魔王からの使者が、リアさん。神からの使者が、私。と理解してもら……涼くん？」
「ＺＺＺ」
「寝てる！？　お約束過ぎませんか、それっ！？」
「……寝顔かわいい」
「ちょ、リアさんも何言ってるんですか、って、な、何しようとしてるんですかっ！」
「もう一度確認を」
「だ、だめです！　に、二度もなんて絶対させません！　私だって……一度も…」

「うるさいなぁ……君のハートを蝋人形にするよう……にゃむにゃむ」
「寝言、こわすぎですっ！　猟奇的すぎます！」
ジャックザリッパーもびっくりの発言に、エルは悲痛に叫んだという。
閑話休題――その後、僕は晩御飯の時間まで目を覚ますことはなかったらしい。

## 9　死んだのは……

――涼。お父さんみたいな、魔王には十分に気をつけなさい。お母さんはあまりのかっこよさに神の使いであることすら忘れて、うっかり惚れてしまったから……キャッ！

何故か赤く染まる頬に手をあて、くねくねしながら言っていた、母さんの言葉だ。

――涼っ！　母さんみたいな、美しい勇者とかには注意しろよ？　自分を倒しに来る天敵を父さんはうっかり一目惚れしてしまったがな！　ガハハハハッ！

こちらも何故だか豪快に笑いながら、意味不明なノロケ話を語る、父さんの言葉だ。

いつも夫婦喧嘩（主に甲冑とか着たチャンバラごっこ）のあと、べったりとくっつきながら、両親たち二人は決まってそう言ってくる。言わせてもらえば、僕にはそのチャンバラごっこすら理解できないのだが。

ハア、魔王？　勇者？

そんな突拍子のないファンタジーな話はどうでもいいんだよ。三十歳になれば、いやでも魔法使いになれる人はいるよ。

限りなく適当にではあるが少なくともこの時――僕はそう思っていた。

「なっ、また涼くんに……ちょっとリアさん！　いくら何でもくっつきすぎですっ、離れてください！」

「そっちこそ離れるべき。余分な脂肪、邪魔」

「なっ、脂肪って！　私はべつに太ってなんか――」

「……間違えた。その肉目ざわり、邪魔」
「な、何も変わってないじゃないですかっ、というかひどくなってます！　だ、だいたいこれは」
「ＯＰＰＡＩ……だね？」
「そ、そう！　おっぱ――って、何言わせるんですか、涼くん！
あまりに真剣な顔だったので、騙されかけましたっ！」

ちっ、惜しかった。もう少しでエルの口から、ポロリ発言がでそうだったのに。やっぱり、ニヒルな顔より、アヒルな顔のほうがよかったかな？　主にくちばしとか。
試行錯誤を始める僕の様子を見て、げんなりとするエル。

「どしたの？　体調でも悪いの？」
「はぁ……昨日あんなことがあったのに、涼くんは相変わらずですよね。私なんか一大決心したのに……」

またもエルは深々とため息をつく。
その姿は、家庭にすら居場所のないアラフォーサラリーマンのような、居たたまれない雰囲気を醸し出している。
リアに当たってるのもそのせいなのか。やれやれ、しょうがないなあ。

「ほら、リアも謝ったほうがいいよ。ただ、エルの豊満なおっぱいを分けてほしかっただけだよね？」
「……いらない」

口ではそうは言うが、ちらちらとエルの胸を凝視している。とても気にしておられる様子だ。

「ほら、エルも。リアも謝ってるし、「べ、べつにおっぱいを分け

てあげなくもないんだからねっ！」という感じで許してあげなよ」
「……」
「まったく、二人とも素直じゃないなあ。この国のことわざに「おっぱい両成敗」というのがあってね？　これは乳差別を無くすべく、平等におっぱいを分けようという――」
「間違ってるとか以前にもはや、どこからツッコんでいいのかわかりませんっ！」「（こくり）」

あれ？　ツンデレは正義、という言葉があってだね？　と続けるつもりだったのだが、僕のことわざ教室は二人によって阻まれてしまった。
これだから、ゆとり世代は！

――若気の至りだよ、若気の至り。

……おっと！　あぶない、あぶない。もうちょっとで、頭の中の悪魔くんにゆとり浸かりにされてしまうところだったよ。若いって怖い。
冷や汗をぬぐう僕を見てエルとリアは、息ぴったりに揃って肩を落とした。
がっくりとしたようすのエルは、半眼で僕を見た。

「わかっているんですか、涼くん。昨日は死神に襲われたんですよ？　それなのに、こんないつもどおりに登校して……こわいとか思わないんですか？」
「僕は、まんじゅうがこわ――」
「そんなオチのない話は聞いてませんっ！」
「年をとるのが、こわいこわいと言いながらも、なんだかんだでここまでやってきましたなあ、ばあさんや」
「えっ、私にふるんですか！？　え、えっと、そうですな、じーさ

――」
「まあ、こわいと言えば、こわいけどね」
「無茶ぶりな上に、スルーですかっ！？　こわいです！」
驚愕に打ち震えエルは、現代社会における恐怖を叫んだ。具体的には、現代の冷たい政治や社会風土に対して。
そんなことは気にせず僕は真剣な顔をする。
「確かに昨日の地面が爆発したり、急に飛んだりしたのはこわかったよ。えせ関西人は、地面から鎌出すし、エルの背中からは羽生えるし」
「……」
唇をかみしめエルは、ぎゅっとスカートのすそを握りしめ、下を向いた。
少し気にはなったけど、僕はかまわず続ける。
「でも爆発の時、すぐにエルが飛び込んできてくれたのは何か……嬉しかったんだ」
「涼くん……！」
「かっこよくて、それでいて温かくて。なにより――おっぱいが大きかったから！」
「……はあ」
心底、やっぱりか、という感じにエルはため息をついた。
む、結構いいことを言ったつもりなのだが。女性はおっぱいをほめると良いって、燐がいってたのに。もしかして、ガセかな？
「おっぱいが……大きかったから！」
「二回言わなくても、わかってます！　聞こえてます！　聞こえて

いてもあえて、流したんですっ！！」

たたみかけるようにエルは三拍子で叫んだ。リズミカル、かっこいい。

あ、そういえば。と僕は手をポンと叩く。

「というかさ、リアはいいの？」

「……何が？」

キョトンと首をかしげるリア。

「いや、昨日のグリムさん。よくはわからないけど、何か君を退治しに来てたみたいだし。それに君は倒されてないよね？」

「（こくり）」

「あ、それは私も気になってました。あの死神は間違いなくやったと言っていましたし。いったいどうやって、あの場をやり過ごしたんですか？」

彼女を心配した僕の問いに、エルも便乗してくる。

昨日。グリムさんこと、えせ関西人は確かにリアを仕留めたと言っていた。それは僕も耳にしているし間違いはない。だけど、今こうしてリアはここにいる。

僕らの質問に少しの間をあけて、リアは――

「……卵」

「え？」「はあ？」

『卵』と口にした。ＴＡＭＡＧＯ？　ゆで卵とか、目玉焼きにできる、あの卵？　とある有名人が好んで食すという、あの。

一様にぽかんとする僕たちを見て、リアは続けた。

「鎌に卵を切らせた」
「あっ、なるほど！　身代わり――そういうことですか。それなら納得がいきます」
「え？　どういうこと？」

一人、エルは理解を確認するように何度もうなづいていた。
そしていまだに思案顔をする僕のほうを向く。

「ええとですね、死神の鎌は切った対象を必ず死に至らしめるものなんです。それはリアさんとて同じことで、切られたら当然死んでしまいます。しかし」
「しかし？」
「あの時、地面の爆発で砂煙が立ち込めていましたよね？　視野の悪い中、リアさんを切ったかどうかなんて切った本人にも判断できません。本当はリアさんの持っていた卵を切っていたとしても、リアさんを切ったと思いこんでしまうわけです。つまりは」
「つまりは、死んだのは卵、というわけだね？」
「正解です。リアさんは卵を身代わりにしたということですね」

はっとした僕の問いにその通りと、うなづくエル。
なるほど……じゃあ、なおさらだよ。

「リアは身を隠さなくていいの？　また狙われるかもしれないしさ、危なくないの？」
「それはない」

眉一つ動かない無表情で、リアは断言した。
え、なんで？　また、グリムさんみたいなのが来るかもしれないのに。訪問販売お断りのシールでも貼るのかな？

言葉の事実を疑うような僕の顔を見て、リアは――
「学校にいけばわかる。心配いらない」
ただ、そう言った。
「確かにそうですね。うちの学校は特殊ですけど、そういうところは面倒見がいいですから。基本的に大丈夫でしょう」
今度はリアの言葉にエルが便乗してきた。
学校？　それって――神魔（かみのま）高校のこと？
「ねぇ、いったい何――」
「わっ、もうこんな時間！　急がないと遅刻しますよ！　さ、涼くんも走って！」「（こくり）」
またも二人のフォーメーションに阻まれ、僕は「何のこと？」と聞くことができなかった。
いつもは仲悪そうなのにこういうときだけ連携プレイがうまい。
それにしても、神魔高校。
とりえは、変人校長だけじゃなかったんだね……
「あっ、卵ってもしかして……タイムセールでゲットしたやつのこと？」
「（こくり）」
「貴様っ、ここで会ったが百年目！　死んだ卵の無念、晴らしてくれるわっ！！」
「何やってるんですか！　早く行きますよっ！」
「ＴＡＭＡＧＯ……君のことは忘れない。さらば友よ、ＦＯＲＥＶＥＲ……っ！」

「卵と友達だったんですか……ちょっと目も当てられない状況ですね」

## 10　気になる幼女は転校生

「ん……？」

予想以上に事情聴取に時間をとってしまったので、遅刻しないため、足早に学校まで駆けていくと、門の前に人だかりができているのに気がついた。

時計を見ると、もう予鈴五分前のチャイムまであと少ししかない。ピンチにやってくる超男も三分の体力が切れかかってくる時間だ。

それにもかかわらず、大勢の生徒たちは校門付近で揃って足を止めているのだ。

「どうしたんでしょうかね。皆さん、中に入ろうとしないで……昇降口に何かあるんでしょうか？」

「つまりはペンギンさんのことだね？」

「ええと……どういう意味か説明してもらっていいですか？」

「いぃよぉ！」

身振り手振り大げさな僕の反応にエルは顔をひきつらせながら、口元をひくひくとさせた。

やれやれ、そんなことも知らないとは。無知とは時として罪なのだよ、と有名なあのお方もおっしゃっていたのに。

「つまりね？　寒いところに在住のペンギンさんは、氷の上から海に飛び込む時、一瞬ためらうんだよ。ぬくぬくとしたところに在住のニートさんは就職をためらうんだよということだね」

「言ってることの主要部分はわかりましたけど、最後の意味わかりませんっ！」

エルは報われないニートたちのために叫んだ、かもしれない。熟練したニートたちと面接官の熱い戦いが容易に予想できる。結果はもちろん、ニートの惨敗だ。主に社会的な面で。

ここで一句。

冬寒い（ふゆさむい）
人は冷たい（ひとはつめたい）
社会です（しゃかいです）
ニートになれば（にぃとになれば）
夢のようです（ゆめのようです）　字余り。

「なぜそんなに清々しい顔をしているんですか……？」

冷めた目でこちらを怪訝そうに見てくるエル。
彼らの気持ちをわかってくれ……わかってくれよ、エル。

「エル……社会って厳しいよね。今じゃ政治はガタガタだし、就活なんか、渡る世間もなんとやらの時代だよ」
「？　まあ確かに最近はそうですけど……でもそれがどうかしたんですか？」
「いや、ニートたちの責任転嫁も一理あると思ってね。俺たちが働かないのは国が悪いからだ、も正論かと思っ――」
「絶対、無責任ですよね！？」
「まあつまるところ、ニートとオタクを一緒にするなってことだね」
「もっと意味がわからなくなりました！」

最近は働かずに稼ぐ、ニートなのにニートでない、ＮＥＯニートがいるらしい。新人類だ。オタクがＮＥＯオタクになる日はいったいいつになるのやら……乞うご期待！

「どうでもいいけどさ、とりあえず校舎のほうにいこうよ。ここにいても遅刻するだけだしさ」
「……そうですね。ホント、そうですよね」「（こくり）」

ガンガンいこうぜという僕の指示に、二人は応じた。片方はがっくりとしてうなだれているのだが。
校門のところまで行くと、集まっている生徒の人だかりがより大きく感じた――のも一瞬のことだった。

『お、お、おはようございます、リアさま！　き、今日もいい天気ですね！』
「……おはよう」

合唱のような声とともにまたしても半分くらいの生徒が土下座した。Ｍクラスメイトだけじゃなかったのか、この学校。
リアは小さく挨拶を呟き、表情のない顔を持続させている。
それにしても朝から土下座とは……シュールな。シュール大賞があったら、ノミネートしたい。
魔族とは、いつもこんななの？　とエルに目をやり、問うてみると、

「そうですね……私も詳しいことは知らないんですが、魔族は徹底した階級制度によって成り立っているので、リアさんのような姫や、王といった階級の人たちは崇めるべき存在、ということでしょうか」
「つまり、歪んだＳＭだね？」
「歪んでいるのは涼くんの心ですっ！」

失礼な、僕ほど心がまっすぐなやつはいないよ。まっすぐすぎてガードレールにぶつかるくらいだよ。心のＪ〇Ｆがいるぐらいだよ。

「――お前たち。どうして進まない」

前方で土下座継続中の生徒たちを見てリアは眉をひそめる。

あまり変化はないのだが、不満をのぞかせたリアの表情を察してか、生徒の一人は戦々恐々としながらも口を開いた。

「そ、それは昇降口のところに……」

恐る恐るそれだけ呟くと、土下座生徒たちは校舎の――昇降口の――あるほうへと揃って視線を向けた。

首を傾げる思いで、僕らもそれに倣うようにそちらを向くと――

「あっ、ウロちゃんだ！　おーい、ウーローちゃーん！」

「ウロちゃん、ですか？　それって誰のことかって前も聞い――あ、あれはっ！」

「……ウロボロス。なぜ」

順に僕、エル、リアはそれぞれ各々の反応を口にしていた。

飛び込んできたのは目を惹く炎色の髪に、深い紅色の瞳の少女の姿。

そして、どこからどうみても幼女にしか見えない、本人いわく、二千歳強の合法ロリ。

僕のゲーム友達である、ウロちゃんがそこにはいた。

「だからその名で呼ぶなと言っておるのじゃ！」

憤る叫び声とともにウロちゃんはこちらに振り返った。おお、気づいてくれた。

幼女特有のソプラノボイス。

人目もはばからない響き渡る声のツッコミ。

これぞ、ウロちゃんの真骨頂「ロリツッコミ」

「どういうことですか、涼くん！？　どうして、あの竜王の姫君とお知合いなんですか！？」

「涼、説明して」

どういうことだ、と言わんばかりに――というかすでに言ってるけど、エルとリアの二人は僕に詰め寄ってくる。

話題の本人であるウロちゃんも、僕のところへとトタトタと駆けてくる。

『ぎゃあぁぁぁぁ、竜王がきたあぁぁぁぁ！』

土下座生徒たちは即座に身をひるがえし、悲鳴とともに去っていった。校舎とは逆のほうに。

集団で授業をバッシングとは……やるな、若人たちよ。お主らも所詮、ゆとりというわけか……

そんなことを想っていると、ウロちゃんがもう目の前にいた。速い。

「お主っ、何度言ったらわかるのじゃ！　妾の名は、ウロボロスじゃ、ウ・ロ・ボ・ロ・ス！」

「おはよ、ウロちゃん。今日はどうしてこんなとこ――」

「聞けえぇぇぇぇ！」

ウロちゃんは奇声を上げた。個人的には「キエェェ！」と言ってほしかった。ゲーム仲間のウロちゃんになら通じると思ったのに……

「で、ウロちゃん。今日はなんで外でてるの？　ウロちゃんはひきこもりのはずでしょ？」

「はぁ……お主は本当に……」

突然がっくりとして、深々とため息をつくウロちゃん。

うーむ、僕、何かしたかな？　それともウロちゃんの調子が悪いのかな。

「それで、涼くん。結局、この方とはどういう関係なんですか？」

「（こくり）」

「あ、うん。この子は僕の友達のウロちゃん。エルには前に話したことあったよね？　ほら、昨日の昼休みに」

「えぇまあ……でも、ウロちゃんさんが竜王の姫だなんて、聞いてないです！」

「え？　『竜王の姫』って、何？」

「知らないで友達になってたんですか！？」

「うん」

僕は迷わずその問いに答えた。なぜかエルは驚愕しているが。

当然だ。ウロちゃんと僕は友達なのだから。

旧校舎に初めて入ったあの時も――

「わっ、何やつじゃ！　ここには誰も入れんように結界がはっておるのに！」

「君は……幼女だね？」

「し、初対面から失礼なやつじゃなっ！」

「お化けの正体は、ロリっ子か……せっかく捕まえようと思ってたのに。モン〇ターボールで」

「ゲーム感覚を実行に移すとは、猟奇的なやつじゃな！」

「えっ、君、ゲームやるの？　じゃ、じゃあ、ドロクエ知ってる？」

「う、うむ。少しならば――」

「やったあ！　エルはゲーム出来ないし、対戦はあきらめてたけど

……これでようやくできるよ！」
「お、お主。妾のこと、こわく――」
「僕は、笹木涼。君は？」
「妾の名はウ、ウロボロスじゃ」
「そっか、じゃあ、ウロちゃんだね。これからよろしくね、ウロちゃん」
「ま、待て。その名はちょ――」

僕自信としては探検のつもりだったんだけど、結果としてウロちゃんと出会うことができた。
それからというもの、時間ができてはちょくちょくとウロちゃんのところ（旧校舎）に遊びに行ったりしている。ゲームしたり、いろいろ話したり。
とにかく、ウロちゃんは僕の大事な友達だ。

「うん。間違いなくウロちゃんは、僕の友達だよ」
「お主……恥ずかしいことを何度も言うな」

そう反論するも、ウロちゃんは頬を赤く染めて照れている様子だった。ウロちゃん、かわいい。
眺めていると、ウロちゃんは「ゴホン」とわざとらしく咳をついた。
そして――エルとリアを鋭くにらみつけた。

「それでお主らは何者じゃ？　妾の呼び名を知っておるからには人間というわけではあるまい？」
「申し遅れました。私の名は、ラファエル。天界において主神を守護していた天使長です」
「魔王の娘、ベリアル。よろしく」

ウロちゃんの問いに、二人はすかさず答えた。
何やら、三人の間でバチバチと火花が散っているようにも見えるのだが、気のせいだと思いたい。
「あっ、僕の名前は笹木涼で――」
「知ってますっ」「知ってる」「知っとるわ！」
総合評価で僕の知名度ポイントが3上がった。

●○●○●○●○●○●○

なぜか、既視感を覚える今日この頃――
「ウロボロスじゃ。皆の者、これよりよろしく頼む」

朝のＨＲ。
あの後、何とか遅刻を免れた僕だったが、今は目の前の事態に唖然としている。
教壇に立つのは、見覚えのある炎色の髪をした少女。背丈に合わない制服で身を包んだその生徒は、先ほど校門で遭遇した――ウロちゃんだった。
皆は口々に「おい、あれって……」「竜王だ……」「旧校舎に封印されてたんじゃ……」などと呟いている。
――ウ、ウロちゃんが転校してきた！？
驚いているのは僕だけじゃないようで――エルも、リアも、クラスメイトたちも口をぽかんとさせている。わかる、わかるよ、その気持ち♪
何とも言えない空気の中、唯一この場においての例外は、先生だ

けだった。

「えー、じゃあ、ウロの席は……笹木の左隣りで」

「うむ、了解じゃ」

「ちょ、ちょっと待てよ、先生！　その席には俺がいるでしょ、俺が！？」

先生は相変わらずの抑揚のない声でウロちゃんの席を僕の左に指定した。ちなみに先生はウロちゃんを「ウロ」と呼んでいる。

しかし、何やら負け犬が納得がいかないと遠吠えを上げている。

それを見て先生は頭を抱えるように片手を置いた。

「あー……」

「涼の隣は俺の席でしょ？　だから、転校生は違う席に――」

「……オマエ、誰だっけ？」

「燐だよっ、紅蓮燐！　担任の教師が生徒の名前忘れるとかどんだけだよ！？」

「あー、とりあえず邪魔だから、席かわれ」

「ひ、ひでぇ！　――って、お前ら、何うんうんとうなづいてんだっ。そ、そんなに邪魔か？　そんなに俺は邪魔なのか！？」

「燐……時として現実とは、残酷なものなんだよ」

「お前の悟ったような優しい顔が一番残酷じゃあぁぁぁぁぁ！！」

僕のなぐさめの効果もむなしく、燐は悲痛に叫んだ。燐の瞳から滝のように流れる涙は、おそらく心の汗だろう。本当に暑苦しいやつだ、青春しとる。

結局、燐は席を一つ後ろに下がることになり、結果、僕の左隣りにはウロちゃんが鎮座している。座る際、僕のほうを見て「ふん」と鼻を鳴らしていた。え、何その反応？

気にするそぶりもなく、腰を下ろすウロちゃん。
うーん、はっきり言って小学生が椅子に座ってるようにしか見えない。
真剣にＨＲに耳を傾けるウロちゃんに、僕は小さく話しかけてみた。

（ねぇねぇ、ウロちゃん）
（……なんじゃ？）
（ウロちゃんの趣味にとやかく言うつもりはないよ？　ただ昨今、いろんな新ジャンルが開発されているけど――）
（？？）
（僕としては、幼女高校生のコスプレもなかなか乙なものだと思うよ）
「コスプレ違うわあぁぁぁぁぁ！！」
「おい、ウロ、うるさい。まだＨＲ終わってないぞ」
「す、すまぬ」

ＨＲ中の先生に不機嫌そうな顔で諌められて、反射的に謝るウロちゃん。
再び席に着き直すと、僕のほうをキッとにらんでくる。

（お主のせいで怒られたではないか！）
（ウロちゃん……それは悲しい誤解だよ）
（？　何が違うというのじゃ、弁明して見よ）
（そうだね、これはある意味地球温暖化より深刻な問題だよ――まあ具体的に言うと、すべてはウロちゃんの発展途上すぎる幼児体型のせいだね。非加盟国レベルだよ）
「辛口なうえに責任まで押し付けられたじゃとぉ！？」
「ウロー、静かにしろー」
「妾が悪いと言うのか？　妾が悪いのかっ！？」

（ウロちゃん、つらい現実から目を背けるのはよくないよ）
「お主が言うなあぁぁぁぁぁ！！」

分け目もふらず、ウロちゃんは一心不乱に叫んだ。
そんな様子を僕は、思春期の「ほとばしる熱いパトス」だと思い、優しい目でウロちゃんを見守る。
うん、大丈夫。僕は見捨てないよ、ウロちゃん……

『……』

後日。僕とウロちゃんの様子をかわいそうな目で見るクラスメイトたちの談があったという。
「笹木涼にもてあそばれる、哀れな竜王がいた」と。

## 11　姉萌え爆弾

実に珍妙というか、ある意味革新的というか。
円卓会議――とはよく言ったもので、現在の僕の状況を表すことのできる唯一の言葉であると断じてもいいだろう。
まあ、本来囲まれるのは卓上（つくえ）のほうなのだが。

「うーん、今日はえらく変わった食事スタイルだね？　この並び方は欧米の様式なのかな、それとも西洋式かな？」
「たぶん誰が見ても四面楚歌のこの状況で、そんなことを考えるのは涼くんしかいないですね……」
「うむぅ……こやつの思考回路はまるで難解迷宮のような仕組みをしておるのぅ」
「（こくり）」

教室の見たままを述べた僕の感想にエル、ウロちゃん、リアの三人は一様に、しかしそれぞれに小難しい態度をとっている。
現在、お昼時。
僕らはいつも通りのメンツにウロちゃんを加えた四人で机を合わせ、普段通りに食事をとっているのだが……なぜかクラスメイトたちは教室を縁取るようにそれぞれが壁に背をつけている。まるで僕たちから少しでも距離を取ろうとしているかのように、だ。
それに見た感じ、あまり昼食は進んでいないようだ。一挙一動、僕らのほうを気にしているようでまったくと言っていいほど、箸が進んでいないし、口も動いていない。
そのため、不可思議なまでに教室は閑散としているのだ。

「えー、でもこんな感じじゃなかったっけ？　ほら、朝尾さんちの食卓とかいうやつでさ」

「……もしかしてとは思いますが、アーサー王の円卓のことですか？」
「うん、そうそう。朝尾さんち、朝尾さんち」
寝耳に水な僕の反応を聞いて、エルは大きなため息をついた。
「朝尾さん、ですか。伝説の『騎士王（パラディン）』も涼くんの前では、庶民的になるということですね……」
「うむぅ……お主も大変そうじゃのぅ、苦労が滲み出ておるぞ？」
「大変」
なぜか、がっくりとするエルを、労わるようにウロちゃんやリアは優しい目で見つめている。
今にも肩に手を置きそうなその様子は、まるで背負う苦労を共感している仲間のようだ。
よし、ここは僕も一つ、エルを励ましてあげよう！
「まあまあ、元気だしなよ。知ってる？　ため息をつくと幸せが――」
じろり、と御三方の冷たい視線が僕を貫く。
人を殺せるとさえ思える、そんな道端に落ちるごみを見るような目で見られた僕は、三人から目を反らし、慌てて言葉を誤魔化した。
いや、この時僕はまだ知らなかったのだが……後々考えてみると――誤魔化して、しまった。が正しいのだろう。
「――《エクスプロージョン》だよ？」
僕が言葉を発した瞬間――視線の先にあった教室の壁が、爆発した。

●○●○●○●○●○●○●○

時と場所変わって、放課後の神魔高校生徒会室。
昼休みの壁爆発事件の容疑者として、なぜか僕に呼び出しがかかったのだ。

「二組の廊下側の壁、および廊下を挟んだその先の壁も破損。幸い怪我人はなし、っと――で？　これはいったいどういうことなんだ、笹木涼」

静かな二人きりの教室。
深く椅子に腰かけ、乱雑に目を通し終えた書類を机に置き、彼女は僕にたずねてきた。

「たぶんというか、きっと壁さんも辛かったんです。皆の道をふさいでいるのが。だから壁さんは自ら崩れて……」
「ほぅ、つまり壁は勝手に崩れたわけだと？」
「ええ、悲しいことですが……きっと壁くんも安らかに成仏、ったい、痛い！　痛いよっ、烈姉ちゃん！」
「烈、姉ちゃん？」
「も、申し訳ございませんでしたっ、笹木生徒会長さま！！」
「ちっ、わかりゃいいんだよ。わかったら二度とすんじゃねぇぞ――涼」
「うぅ……痛い。何も本気でつねることないじゃないか……」

憮然とする烈姉ちゃんを恨みがましく睨みつけ、僕は真っ赤になるまでつねられた頬をさする。

まったく、僕のほっぺたは餅じゃないんだよ、このヤンキー女！
とは言えないので黙っておく。

「何だ、まだ仕置きが足りなかったのか？」

ぎろり、とまるで飢えた猛獣のような鋭い眼光が僕に向けられた。
な、何で、ばれたの！？

「い、いえいえ、滅相もないですっ。史上最高のお姉さまをもてて、笹木涼は本当に幸せ者だなぁと思っていただけです！」
「馬鹿が、小恥ずかしいこと言ってんじゃねぇよ。誰かに聞かれたらどうすんだ」

口ではそう言うものの、烈姉ちゃんの頬は朱に染まっていた。おそらく照れているに違いない。
ダイナマイトより危険な爆弾の二度目の火種を消火し、何とか緊急回避に成功した。スキャンダルされた政治家並みの僕の世渡り上手スキルに賞賛してほしい。

「ったく、お前は……本当に世話の焼ける弟だな」

僕のほうを見て愚痴る彼女の名は、笹木烈（ささきれつ）。
先ほどから僕が呼称しているように、僕の姉。加えて、この神魔高校の生徒会長でもある。特徴は母さん譲りのブローのかかったブラウンの髪と艶やかな美貌。何より男より男前すぎる発言や行動で主に同性中心で好かれまくっているという。燐から聞いた噂によれば、秘密のファンクラブまであるらしい。
自慢の姉といえば、確かに「自慢の」姉なのだが。

「今回のことは大目に見てやるが、これからは気をつけろよ？　エ

ルちゃんも心配するだろうからな」
深く釘をさすように烈姉ちゃんは注意を促す。
でも、僕は――
「でもさ、烈姉ちゃん。僕は本当に何もしてないんだよ？　それなのにどうして僕が気をつけなきゃいけないのさ」
ずっと烈姉ちゃんの言うことには矛盾を感じていた。
あの時、僕は壁に触ってもいなければ、近づいてすらいない。
完璧すぎるアリバイゆえに、どうして僕が犯人扱いされているのかがわからなかった。
「あぁん？　お前が『魔法』使ったからじゃねぇか。そのせいで壁がぶっ壊れ……」
「？　どしたの、烈姉ちゃん」
なぜか、急に言葉を止め、眉をひそめた烈姉ちゃんに僕は声をかけた。
「涼……お前、『詠唱』はしたのか？」
「詠唱って、何？　僕は別に歌ってないけど？」
「いや、そうじゃなくてだな。魔法を発現するための呪文を詠唱したのか、って聞いてるんだ」
「魔法？　やだなあ、烈姉ちゃん。ゲームや漫画と現実をごっちゃにしたら駄目だよ？」
「――ちっ、親父やお袋め、涼に何も教えてやがらねぇじゃねぇか……」
あっけらかんとした僕の答えに烈姉ちゃんは苛立ちを隠さず、舌

打ちしていた。
えーと、お姉さまは何ゆえ、お怒りになっておられるのだろうか？　それとも僕が気に障ること言ったのだろうか。とりあえず怖い、女暴走族（レディース）の総長も真っ青なくらいに怖いので今すぐ逃げ出したい。

「――おい、涼」
「は、はいっ。何でございますですか、お姉さま！」
「噛み噛みになってんぞ……まあいいや。涼、お前が今日、教室で口にした言葉をこの紙にかけ。一字一句正格に、だ」
そう呟くと烈姉ちゃんは一枚の白い紙を取り出し、僕に手渡した。
何の変哲もない、真っ白な紙。

「え、えーと、この紙に何か意味があるんでしょうか……？」
「ねぇよ、そんなもん。とりあえずサッサと書け」

有無を言わさぬ物言いに、僕はしぶしぶとペンを取り出し、書き始めた。
幼いころも烈姉ちゃんの意見に対抗したり、反対した時は……二度とそんな気が起こらないまでに躾（しつけ）されたのを思い出す。
痛い、苦しい、ごめんなさいの連続。
詳しいことを語るなど、恐ろしくて震えが止まらなくなるぐらいだ。
基本的に父さんや母さんは怒るということをしないので、烈姉ちゃんに代わりに躾けられた――というイメージがある。だから正直言うと、親より怖い存在なのだ。

「おっ、書けたじゃねぇか。見せてみろ」

僕が書き終えた瞬間、ヒョイと烈姉ちゃんの手が紙をとっていっ

た。
文句は言わないんじゃない、言えないんだ！　などと、大捜査線もびっくりなことを考えていると――
「なるほどな……『エクスプロージョン』か。確かこいつは、空気を暴発させることしかできない魔法なんだがなぁ」
難しい顔で僕を見やる烈姉ちゃん。
何やら心配そうに僕を見た後、ふぅとため息をついていた。
「よし、まあ原因はわかった。とりあえず、涼。お前二度と『エクスプロージョン』という言葉は使うな。わかったな？」
「え、でも、烈姉ちゃん。何で、エクスプロージ」
「――使うなつってんだよ、わかったな？　わかったら、返事しろ」
「う、うん……わかったよ」
「よしよし、それでいい。それとな――」
いろいろと腑に落ちなかったけど、ここで反論してもあとが怖いだけ。
逃げるんじゃないっ、一歩引くだけだ！　そう自らに言い聞かせ、戦略的撤退な考えをまとめていると、
「涼、お前――生徒会に入れ。姉命令だ」
さらに大きな爆弾が投下されるという、降伏宣言も無視した状況になったのだった。

## 12　拡声器から鬼

もう、何年も前の話――

「おい、何してんだ。晩飯には帰るっつってただろうが」

「あ、烈姉ちゃん……」

冷たい風も吹き始めた夕暮れ時の閑散とした公園。

辺りが薄暗くなり、日が沈み切りそうになっている現在の時間帯は、本来ならばもう子供が遊んでいる時間などではない。普通なら僕と同じくらいの歳の子は、家に帰るか習い事に行くかのどちらかだと相場は決まっている。

だけど、僕はそのどちらでもなかった。

「猫がね……怪我してるんだ」

おもむろに小さな声でそういうと僕は大事そうに抱きかかえている猫を烈姉ちゃんに見せた。

白い毛で覆われた身体。柔らかそうな耳、そして――九本の尻尾をした可愛い子猫を。

「つーか、どこの世界に尻尾が九本もある猫がいんだよ……」

「失礼だよ、烈姉ちゃん。タマは立派な猫だよ！」

「名前も付けちまってんのかよ……」

「猫」という言葉には、些か鈍い反応ではあるが烈姉ちゃんはじっと子猫を見つめた。

そして疎らに身体を見た後、その視線はある一点で止められる。

「あっ、足んとこ怪我してんな……」
「そうなんだよ、見つけた時にはもう痛そうにしてて……この子、何とかできないかな、烈姉ちゃん？」
「病院はまだしも、飼うのはな……」

やや言い含めた様子で烈姉ちゃんは呟く。
もしかしたら拒絶されるかもしれない、という一抹の不安をよそに恐る恐る僕は言った。

「僕、ちゃんと面倒をみるよ！」
「あー、でも親父やおふくろが何ていうかだよなぁ……うちはペットなんて飼ったことねぇし」
「……やっぱり駄目なのかな？」

予想していた事とはいえ、あまりおもわしくない烈姉ちゃんの反応に僕は俯いてしまう。
そんな僕を見てか烈姉ちゃんは後ろ手に頭をかいた。

「ああもうっ、そんぐらいで泣きそうになってんじゃねぇよ！　わーった、わーったよ！　あたしが親父とおふくろを説得してやっから」
「ホントっ！？」
「あぁ、ホントだ、ホント。だから泣くんじゃねぇよ、みっともねぇ」

子供をあやすような口調で僕をたしなめる。まあ文字通り、僕は子供だったのだが。
そして――僕に代わってタマを抱きあげ、烈姉ちゃんは空いていた手を差し出す。

「だから、家帰んぞ。こいつの手当てもしなくちゃだしな――あ、後、晩飯が冷めるからな」

と、ニヒルな笑みを浮かべた烈姉ちゃんの手を僕は嬉しそうにとった。

「うんっ、ありがとう！　烈姉ちゃん愛してる！！」

「はいはい、あたしも愛してるよ……涼」

かっこよくて、いざというときには頼りになる自慢の姉――笹木烈。

幼いころ……いや、今になっても尊敬できる烈姉ちゃんは、僕にとって「怖い人」以上に「憧れの人」なのだ。

●○●○●○●○●○●○●○

生徒会に入れ事件から日が明け、翌日。

昨日は結局、「詳しいことは明日言う」と具体的なことは何も言われずだったので、正直に申すなら、何がしたかったの？　という感じだ。

生徒会云々よりも僕のお仕置きをしたかっただけなのでは？　とさえ思う。

まあ僕としては、ゲームする時間が減らないほうがいいというのが本音なのだけど。でも烈姉ちゃんにも心配させるなと釘を刺されているので一応、エルたちには報告しておこうと思い立ったわけ。

「――という感じで生徒会に入れと言われました」

「涼くんの話だけ聞いていると、カツアゲ、もしくは恐喝みたいで

すよね……」

すでにパターン化している朝の登校。

未だに通り過ぎる人たちに羨ましそうに見られる僕なのだが、はっきり言ってエルとリアという美少女に挟まれる身にもなってほしい。あなたたちは恐縮という言葉を知っていますか？

「まあ、それも涼くんを想ってのことでしょうね。何だかんだ言っても烈さんは昔から涼くんに甘かったですから」

「えー、そうかなぁ。僕はいっぱい殴られた思い出しかないんだけど、こう、ボコボコにさ」

「私は文字通り、『愛の鞭』だったと思いますよ」

一人納得しているエルは何度も理解を確かめるようにうなづいている。

うーん、でも僕はただのストレス発散だと思うけどなぁ。

「リアはどう思う？　やっぱり、ひどいと思うよねぇ」

同族意識欲しさに僕はリアへと救援を求めた。

ただ味方が欲しかっただけなのだが、しかしそれは異なる話題の発火を招いてしまった。

「ひどい。涼は私のものなのに」

「いや、そういうことを言ってるんじゃ――」

「まだ言っているんですか、あなたは。この際はっきり言わせてもらいますけど、いい加減しつこいですよ。しつこい女は嫌われるという言葉を知らないんですか？」

「あの、だからそういうことじゃ――」

「ふっ、負け犬の遠吠え」

「何、勝ち誇った顔しているんですか！　すごくむかつきます！」
「……とりあえず、学校行こう」

互いに火花を散らし合うような始まってしまった竜虎の諍いをよそに、僕はなるべく穏便に学校に行く方法を模索していた。
火をつけた張本人にも関わらず、である。

●○●○●○●○●○●○●○

「おい、遅いぞ涼！　皆、散々待ちくたびれてるぞ」

昨日壊れたばかりなのに修復されていた壁をぺたぺたと触っていると、教室の中から悪友――紅蓮燐の声がした。やつもこの壁と同じく、身体中を覆っていた包帯はすでにない。
うん？　というか、皆待ってるって何？
と意味がわからず不思議に思い首をかしげていたのだが、それも束の間。教室に入ると異様なまでの雰囲気に僕は思わず息をのんだ。

「ま、M（マゾ）クラスメイトの諸君……」
『Mじゃねぇって言ってんだろ！？』

僕を待ち構えていたのは、土下座クラスメイト、通称・Mクラスメイトたちだった。
しかし、どうやら僕のａｇａｉｎな発言に彼らのほうがびっくりしているようだ。

「それで、僕を待っていたとはどういうことなの？　ケンシ○ウ的な感じなの？」

「いや、べつにラオ〇みたく待ってわけじゃないんだが……とにかくだ！」

この話はこれで終わり、という風に話を切り上げるように燐は大声を出した。

「皆がお前を待ってたのは、壁のことでだよ！」
「ああ、うん。人生、誰しもぶつかる時は来るからね……めげないことが大事、と言っておこうかな」
「違ぇよっ、誰も「人生の壁」については聞いてねぇんだよ！　というか、さりげなくアドバイスすんなや！」
「じゃあ、あの壁かな。ほら、燐は特に多いじゃない？　皆との、その……」
「心の壁でもねぇよ！？　というかその優しい目は止めろっ、ものすごく居たたまれなくなるから！」

周りとの心の壁を気にする高校生、紅蓮燐は身近にあった冷たい現実を知った。
しかし、なおも燐は納得がいかないようで――

「だーかーらぁ！　そういうことじゃなくてだなぁ、俺たちが聞きたいのは教室の壁を吹っ飛ばした魔法のこと――」

ピーン、ポーン、パーン、ポーン。
中々如何してリズミカルな拡声器の音に燐の声は遮られる。

『あー、生徒会役員の呼び出しをする。一年二組笹木涼、一年二組笹木涼。今すぐ生徒会室に来い、来なかったらぶん殴る――以上』
「……は後でいい。とりあえず無事を祈るぜ、涼」

聞こえてきた鬼……じゃなくて烈姉ちゃんの声に同情してくれたのか、先ほどまで突っ掛かってきた燐はやけに爽やかな笑顔と、生温かい目を向けてきた。いわいる、死亡フラグというやつだ。

僕は死ぬのか……

## 13　準備するのは……

「遅かったじゃねぇか、後もうちょっと遅かったら問答無用で殴るとこ……何でエルちゃんたちまでいんだよ」

神魔高校三階にある生徒会室に入っての第一声。

窓際にある一番大きな机に腰かけ、声主である烈姉ちゃんは恐ろしい事を言ってきた。

やっぱりエルたちを連れてきたのは、正解だった……

「ははは……成り行きといいますか、主に「僕だけじゃ殺されるよ！」と泣きつかれたといいますか」

「うむ、概ねその通りじゃ。その他にも「ウロちゃんは友達だよね？　友達は身代わりだよねぇ！？」等のことも口走っておったが」

「（こくり）」

……エル、リア、ウロちゃんの三人を連れてきたのは、間違いかもしれないと後悔した。主に僕のプライバシー面における問題で。

ちなみにエルと烈姉ちゃんは僕と同様、幼馴染の関係。

なので、昔から仲の良かったエルを連れてくれば鬼（烈姉ちゃん）の機嫌もとれると僕は踏んでいたのだが……

しかし、何故か苛立った様子で烈姉ちゃんは頭を掻き毟る。

「ちっ、余計なことしやがって。せっかくあたしが気ぃ使ってやったのに」

「ごめんなさい……」

「……まあいい、遅かれ早かれエルちゃんたちには伝えようと思ってたからな」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめ……」

「ったく、どんだけ謝ってんだよ。許してやっから顔上げろ、涼」
「殺さないでください殺さないでください殺さないでください殺……」
「つーか、どんだけビビってんだよ！　あたしは鬼かっ、鬼なのか！？」

鬼です、と答えるわけにもいかない。
そんな愚かなことを口にしたら、僕の未来は高確率でノストラダムスの大予言より恐ろしい事になるに違いないのだから。
地団太を踏み烈姉ちゃんは「納得いかねぇ」と不貞腐れていたが、エルに宥められ「次はねぇぞ」と僕を一睨みだけの事態で何とかやり過ごすことができた。
つきましては、頑張ってくれたエルに「烈姉ちゃん爆弾処理員」の称号を授与しよう！

……
……
「あー、非常に癪というか、不本意ではあるが本題に移る。まず、この馬鹿が起こした騒動はとりあえず生徒会に入会することでチャラにするわけだが……」
「えっ、僕？」

この馬鹿、という辺りで僕を指差す烈姉ちゃん。騒動は生徒会でチャラ、とかよくわからないことを言ってるけど……
なおも当然のように、戸惑う僕を無視して烈姉ちゃんは続ける。
「生徒会に入っときゃ、魔法の発動における魔族云々の勧誘もちったぁマシになるだろ……あんたもそれでいいよな、魔族の姫とやら」
「べつにかまわない」
ジャイアニズムを振りかざす烈姉ちゃんの物言いに、リアは無機

質な答えを返した。
リアの即決即断に満足したのか、烈姉ちゃんは大きくうなづいて――

「まあ、当面の問題はこいつの命を狙う輩についてだ。そのへんはエルちゃんたちのほうが――」
「ちょぉぉぉぉっとお待ちいただきたいぃ！」
「……えらく仰々しい待ったをかけますね、涼くん」

エルが胡散臭そうな目で見ているが、今はどうでもいい。発売日まで待ったのにとか、待ってないとかそんなことどうでもいいんだよ！
僕の――僕の命が、ね、狙われているだって！？

「そ、それはどういうことなの、烈姉ちゃん！　詳しく、ＫＷＳＫ！　殺し屋的な人が僕を狙ってるみたいな感じっ！？　そして狙っている人はもちろん、ゴル○１３的なプロの人なのかな！？　僕的には○●７のほうが好み――」
「落ち着け、馬鹿が」
「っ痛い！」

暴走した僕を止めるためなのか、烈姉ちゃんは鋭く僕にチョップを入れてきた。心なしか僕を見るその目が可哀そうな人たちを見る目とそっくりなのは、おそらく気のせいだろう。

「エルちゃん……ホントにこいつ、もらってくれんのかい？　あたしは押しつけてるみたいで罪悪感を感じるんだが」
「ははは……涼くんは漫画とかゲームが好きですからね。こういう話に食いつくのは見えてましたしね」
「すまんな、エルちゃん。迷惑をかけて」

「お互い様ですよ、そんなの。どちらにしろ当の本人は「どこ吹く風」ですから……」
「ああ、こいつは本当の馬鹿だからな……」
……気のせい、だろう。
「まあ、とりあえず見せたほうが早ぇか。おい、リリス！　『召喚式』の準備はできたか」
「はぁい、できてますよぉー」
この部屋に入った時から気になっていた衝立（ついたて）。
その向こう側に烈姉ちゃんが声をかけると、のんびりというか間延びした声が返ってきた。
「？　誰かいるの、烈姉ちゃん？」
「ああ、さっきからちょいと準備をしてもらっててな」
何の準備なの、と次口を開こうとしたけど、目の前の猛獣がニヤリと笑ったのを確認して僕は後ずさった。
危ない……とっても危険な匂いがするよぅ！
戦略的撤退をした僕と入れ替わるように前に出たのは――ウロちゃんだった。
「召喚式とは言うが、何を呼ぶつもりじゃ？　魔獣か、それとも精霊の類か？」
「おっと話が早ぇな、竜王のお嬢ちゃん。だが、今回召喚するのはそれじゃねぇんだ」
「うむぅ、では何を呼ぶというのじゃ？」
もったいぶるような口調の烈姉ちゃんに、ウロちゃんは眉をひそ

めた。
そんなウロちゃんの様子に烈姉ちゃんは小さく笑みをこぼした。
「もっと簡単な――武器（ウェポン）、だよ」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7944z/

---

潜在能力は有効に使いましょう（コメディ系）

2012年1月13日08時53分発行